# トゥインクル　トゥインクル

兼高由季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トゥインクル　トゥインクル

【Ｎコード】
Ｎ７００４Ｅ

【作者名】
兼高由季

【あらすじ】
「マコは僕のだ！」幼い声でそう主張していた彼の切り札は双子という血のつながりだった。だが今は、その血のつながりが、二人を隔てる最大の障壁になってしまった。双子の姉弟の禁断の恋を描きます。

## 1．きらきら星

叩きつけるようなピアノの音。
それは、とてつもなく不本意な目覚めだった。
思い切り手を伸ばし、ナイトテーブルの上にとぼけた顔で座っている、クマの目覚まし時計を取り上げた。

文字盤が示す時間は午前二時。
草木も眠る丑三つ時だ。

真琴はぎゅっと目を閉じて、右へ二回、左へ二回、寝返りをうった。
続いて身体を折り曲げ、耳をふさぎ、枕の下に頭を突っ込んだ。

寝たのはほんの三十分前なのに。
明日は実力テストなのに。
遥は……双子の弟は……。

（何、考えてんのよ！）

空しい努力をしばらく続けた後、真琴は気力をふりしぼり、ベッドから這い出した。
長い髪をひと揺らしし、パジャマの上に薄手のカーディガンをひっかけて、一つひとつ照明のスイッチを入れながら、どこかおぼつかない足取りで、ゆっくりと階段を下りていく。

予想したとおり、廊下の突き当たりのドアが、少しだけ開いていた。
目尻の少し上がった切れ長の目が、心持ち険しくなる。
防音設備は完璧でも、きちんとドアをきちんと閉めなくては意味がない。

ドアを押し開け息を吸い込んだ。
怒りを爆発させるつもりだったのに、せっかく吸い込んだ息は、次の瞬間、力なく唇からこぼれて落ちていた。

照明を消した部屋の奥。
開け放った窓から淡く光る満月が覗いていた。

夜風に翻るカーテン。
窓で切り取られた幻想的な月の夜。
だか、月光を浴びながら、グランドピアノに向かっている少年の姿は、美しい月よりもなお美しかった。

狂気をはらんだ演奏は、真琴が部屋に足を踏み入れると、美しい旋律に変化した。
幼い頃から神童の名を欲しいままにしてきた弟が、気まぐれに披露する即興曲。
その完成度の高さは高名な音楽家も舌を巻くほどで、真琴はただ圧倒されたまま、その場に立ち尽くすことしかできなかった。

「……ハル……」

弟は顔を上げ、甘く整った白皙の美貌に、無邪気な微笑を刻んでみせた。

「マコ、おいで、一緒に弾こう？」

その言葉を合図に、鍵盤に触れた少年の指先で、新たな音がポンとはじけた。
転がるような軽やかな旋律は、モーツァルトの『きらきら星』。

ピアノを習い始めて間もない頃、毎日のように一緒に連弾した曲だ。
誘うように音がはずんでいる。
真琴の頬が紅潮し、指がうずうずし始める。
ためらいを追い払い、弟と並んで椅子に腰掛けた。
一呼吸置いて二つの音が絡み合い、音楽となって流れ出す。

真琴が大好きだったピアノをやめたのは、他ならぬ遥のせいだった。
でも、弟が悪いわけじゃない。

先にピアノを始めたのは真琴の方だった。
真琴がピアノに熱中すると、弟もやると言い出した。

真琴が間違えれば、遥も間違える。
真琴がスランプに陥ると、遥も同じように弾けなくなる。
当時はあまりに幼くて、そのことを少しも不思議とは思わなかった。
だから弟が自分に合わせてくれているのだと気がついた時、ピアノに触れることができなくなった。

曲を最後まで弾き終えて、真琴は椅子から立ち上がった。

「弾くのは構わないけど、ドアはちゃんと閉めなさいね」

当たり前のことを言っただけなのに、遥は鍵盤に視線を落としたまま、動かなくなった。
捨てられた仔犬のように、背中がしょんぼりと丸くなっている。

思わず伸ばしかけた手を引っ込めて、そのまま部屋を出て行こうとした時、それまで身じろぎもしなかった弟に、いきなり腕をつかまれた。

「ドアを閉めたんじゃ、意味がないんだ！」

つかまれた腕が熱くて痛い。
とがめるように眉をひそめると、遥は傷ついた目をしたが、それでも手を離そうとはしなかった。

「マコの気を引きたかったんだ、マコが僕のことを避けるから……」

いつもは明るい瞳の色が、闇を映して闇色に見える。
無意識に後ずさった時、強い力で抱き寄せられた。

「僕のことが嫌い？」

どこかすがるような声だった。
真琴は口を開いたが、どうしても言葉が出てこない。

長く形の良い指が伸びてくる。
震えているのは自分だけかと思ったら、弟も小さく震えていた。
そっと顎を持ち上げられた時、潤んだ瞳に怯えを含んだ焦燥を見つけ、真琴は辛うじて理性を取り戻した。

「ハル、嫌いじゃないわ。でも……」

心臓が爆発しそうで息ができない。
互いの体温が上がっていく。

真琴とは少しも似ていない、母親譲りの美貌が近づいてくる。
形の良い唇が自分のそれに触れそうになった時、真琴は渾身の力を込めて弟を突き飛ばしていた。

## 2．姫とナイトと…

私立桜明学園は、全国一の東大進学率をほこる進学校として知られている。

それでいて、学業一辺倒というわけではなく、芸術・スポーツ方面の特待制度を設けており、惜しみなく金を投じた近代的な校内には、全国模試で上位に名を連ねる秀才から高校総体の花形にいたるまで、様々な生徒が集っている。

新生徒会長の一条真琴と同じく副会長の美山聖の場合は、自他共に認める成績優秀組だ。
加えて聖は剣道部のエースでもある。

全国高校剣道選抜大会の個人戦で優勝した実力は、学費免除の条件を十分にクリアしているのだが、聖の祖父は総合病院を経営する地元の名士であり、学園設立時から多額の寄付を続けてきた支援者でもあり、学園側が学費免除を申し出たところで、一笑に付されてしまうだけだろう。

他薦で祭り上げられた選挙の結果は、聖が一位で真琴が二位。
真琴が生徒会長をやっているのは、部活が多忙な聖に頼み込まれたからに他ならない。

寮生の多いこの学校で、二人は数少ない通学生であり、さらには仲の良い幼馴染でもある。
ついでに言えば、絵に描いたような美男美女でもあり、就任挨拶のために二人が壇上に立った時、居並ぶ生徒たちのあちこちから、羨望のため息がさざなみのように漏れた。

その日以来、二人のあだ名は「姫」と「ナイト」。
それは図らずも二人の関係を、なかなか巧みに表現したものだった。

実はこの学園にはもう一人、彼らと深い関わりを持ち、さらに有名な生徒がいる。
彼の名前は一条遥。
一条真琴の双子の弟で、メンズ誌の表紙をしばしば飾る人気モデルであり、芸術の神に選ばれた天才だが、学園一の問題児でもある。

学校はさぼり気味。
成績は超低空飛行。
部活にも委員会にも無縁だが、そんなことは、一条遥に関して言えば、どうでも良いことだった。

母親譲りのノーブルな容姿は、他者をことごとく魅了する。
それなのに、遥自身は誰も愛さない。
ただ一人の例外は、双子の姉である一条真琴だけ。
つまりは、極端な、シスター・コンプレックスだ。

選挙後初の生徒会は、そろそろ終盤にさしかかっていた。
壇上では、新会長が、黒板に向かってチョークを走らせている。

縦に書いても、横に書いても、真琴の文字は曲がらない。
真面目で几帳面な性格は、こんな所にも現れている。

開け放った窓から強い風が吹き込んだ。
チョークの粉が舞い上がり、真琴が小さく咳をする。
気管支が弱い幼馴染のために、聖は無言で立ち上がり、窓のそばに歩み寄った。

（生徒会室の黒板はホワイトボードに変えてもらおう）

今日の所は暑くても、窓を閉める他はない。
心の中で、生徒らしからぬ、不遜なことを考える。
聖は、真琴のためにだけ、ためらうことなく美山家の力を行使する。
A棟の三階にある生徒会室の窓からは、向かいのB棟がよく見える。
つまり、その逆も言えるわけだ。

窓を閉めようとした手がぴたりと止まる。
一瞬だけ細めた目を、聖はぎょっとして見開いた。

それは現実離れした光景だったが、幻にしてはあまりにリアルだった。
立ち入り禁止のその場所に、しかも手すりの上に、制服姿の少年が立っている。

「はっ！」

相手の名を叫びそうになって、慌てて言葉を飲み込んだ。
ただならぬ気配を察し、それまで黒板を見ていた連中が、一斉にこちらを振り返った。

「どうしたの？」

不思議そうな面持ちの真琴に訊ねられ、窓の前に仁王立ちした聖は、通路側の天井を指差した。

「ほら、あそこ、人の顔が浮かんでる！」

その場にいた全員が、一斉に天井を仰ぎ見た。
そのわずかな間隙をついて、聖は窓とカーテンをすばやく閉めた。

「ごめん、勘違いだ。実は体調が悪くてね。中座するのは申し訳ないけど、保健室に行ってくる」
「えっ！？　大丈夫なの？　私も一緒に！」
「だめだめ、君は生徒会長だろ？」
今にもチョークを放り投げて、走り寄って来そうな真琴を手で制し、聖は生徒会室を後にした。

それからの動きは早かった。
剣道部のエースは、陸上部にしばしば助っ人を頼まれるスプリンターでもある。
渡り廊下を疾走し、すれ違う生徒たちが呆然と目を見張る中、Ｂ棟の屋上に続く階段を二段飛ばしで駆け上がり、あっという間に目的地にたどりついた。

屋上につながる扉は、鍵がかかっていなかった。
そして向かいの窓から見えた少年、一条遥は、幅十センチの手すりの上に佇立していた。

細身の長身。
しなやかに伸びた手足。
淡い色の髪が、風になびくたびにキラキラと輝いて、思わず目を奪われそうな光景だが、観賞している場合ではなさそうだ。
「ハル、わかっている？　そこから落ちたら確実に死ぬよ」
青い空を背景に、白いシャツの背中が小さく揺れた。

何が面白いのかわからないが、どうやら笑っているらしい。

「そんなことを言うために、息せき切って走ってきたわけ？」

からかうような眼差しをちらりとこちらに向けた少年は、午後の陽光を全身に浴びながら、手すりを蹴って跳躍した。

「ハルっ！」

差し伸ばした聖の手が空を切り、バランスを崩して手すりにしがみついた聖の背後で、鮮やかな後方宙返りを決めた遥が、トンと軽やかに着地した。

肩で息をする聖とは対照的に、涼しい顔で笑っている。

双子の姉とはあまりに違う、一条遥の破天荒ぶりに、さすがの聖も切れそうになった。

「ふざけるのもたいがいしろ！　四階建ての校舎の屋上からのダイビングすれば確実に即死だぞ！　こんなことして、僕に恨みでもあるのか？！」

「もちろん、あるよ」

足元に転がっていた、黒縁眼鏡を指先で拾い上げながら、遥はつまらなそうに呟いた。

「あーあ、レンズにヒビが入っちゃった。でも、僕、謝らないから」

「……」

「だって、カーテンを閉めたの、ヒー君だろ？」

発せられた声はしたたるような毒がこもっていた。

## 3. A boy meets a girl.

美山家の跡取りだった聖の伯父が自動車事故で他界したのは、聖が五歳の時だった。

三十歳で亡くなった伯父は独身だったから、母校の大学病院に勤務していた父が、急きょ実家に呼び戻され、一家でこの町に引っ越してきた。

美山御殿と藤原屋敷。

この町で知らぬ者のいない二つの邸宅は、高級住宅地の中でも特に富裕層が集まる場所に建っていた。

かつては藩主の御殿医をしていたという美山の家は、広々とした庭を持つ重厚な日本建築。

そしてその規模には到底及ばないものの、日本を代表する大女優である藤原麗華の家は、瀟洒な白亜の洋館だった。

当時、美山の家にはアイリッシュ・ウルフハウンドが飼われていた。犬の散歩係だった伯父が亡くなって、父は慣れない仕事でてんてこ舞いで、母は犬が苦手だったから、祖父が学界などで出かけてしまうと、犬の相手をする者がいなくなる。

使用人は何人もいるが、皆それぞれに忙しく、餌やりと犬小屋の掃除以外の世話をしようとはしなかった。

一日中、鎖につながれている姿を見ていられなくて、聖は犬を連れ出した。

散歩をさせてやろうと思ったのだが、その日に限って、滅多なことで吠えたりしないおとなしい犬が、ものすごい勢いで駆け出した。

「助けて！」

自分よりはるかに大きな犬に引きずられながら、思わず悲鳴をあげた時、今まで人っ子一人いなかった家の前の通りに、忽然と何かが現れた。

聖は愕然として息を飲んだ。

道をふさぐようにして目の前に立ったのは、自分と同じぐらいの年頃の、若草色のワンピースを着た少女だった。

「逃げて！　早く逃げて！」

必死で足をふんばったが、相手は大きな狩猟犬だ。

転んだはずみに、握っていたヒモが手を放れ、自由になった巨大犬は、猛然と少女に突進した。

直視できずに目を閉じた。

もうだめだ。

あの子は、きっと、かみ殺される。

助けなくてはと思うのに、恐怖のあまり、どうしても身体が動かなかった。

だが、いくら待っても、少女の悲鳴は聞こえなかった。

うずくまったまま固まっている聖の頬を、湿った生暖かいものがべロリと撫でた。

ハアハアという動物独特の荒い息を耳元で聞かされて顔を上げると、若草色の少女と目が合った。

目が合うと、少女はにこりと微笑んだ。

自分と同じ年頃の、真っ直ぐな黒髪を持つ、お人形みたいに可愛い

子だった。
でも、人形なんかじゃない証拠に、少しだけ目尻の上がったつぶらな瞳は、優しい光をたたえている。

「びっくりした？　でも、大丈夫、シェリーは友達なの」
「この犬、シェリーっていうの？」
「自分の家で飼っているのに、名前も知らないんだ？」

少女がくすりと笑うと、天使の輪が浮かんだ髪がサラリと揺れた。
その間もふっくらとした小さな手は、愛しげに茶色の毛を撫でている。

嬉しそうにしっぽを振る猛犬と、小さな女の子の組み合わせは、幼い少年の目に、ひどく現実離れして見えた。
この子はいったい誰だろう。
登場の仕方からして、普通じゃない。

「君は誰？　犬と友達って本当？　犬と話ができるの？」

矢継ぎ早の質問に、犬を抱きしめた少女は、きょとんとした顔で聖を見上げた。
じっと瞳を合わせているうちに、聖は耳まで赤くなり、さらに墓穴を掘り始めた。

「あ、ありえないよね。で、でも、この通りには、さっきまで誰もいなくて、助けを呼んだ途端、君が現れて……」

湧き上がる羞恥とためらいを振り払って、聖は少女に向き直った。

「君、ま、まさか……て、天使じゃない！？」

たぶん、当時読んでいた、本か何かの影響だ。
あの時のやり取りは、思い出すたびに、顔から火が出そうになる。
真琴はシェリーの毛に顔をうずめて楽しそうに笑い、茹でダコのようになっている聖の手を取って駆け出した。

白亜の洋館。
その周囲を取り巻くフェンスに縦横無尽に絡まる木香薔薇。
咲き誇る花で重く垂れ下がった枝をそっと手で払いのけると、そこだけフェンスの下の方が壊れていて、子供一人がちょうど通れるほどの小さな空間が口を開けていた。
少女は洋館の住人だった。

「ハルがやったの。ここを通れば、門まで行かなくても、ピアノ室から簡単に出入りできるのよ」
「ハルって？」

疑問を口にした時、少女の名前をまだ聞いていないことを思いだした。
それどころか、助けてもらっておきながら、礼はおろか、自己の名前だって告げていない。

「あ、あの、僕の名前は……」
「知ってる。ヒジリくんでしょ。私はマコト。天使じゃないわ。ただの人間。でも、ハルはね……」
少女の髪を彩る若草色のリボンがふわりと揺れて、聖の頬を撫でた。
「ハルは本物の天使なの」
耳元でそっと囁かれた秘密の言葉。

あれば、冗談だったのか、それとも本気でそう思っていたのか。
聖は今でもたまに考えることがある。

真琴に訊ねても、答えることはできないだろう。
訊ねる気もないけど。

## 4．トライアングル1

（ストーカーじゃあるまいし、あいつは、いつになったら、姉離れするんだろう）

屋上で姉の姿を見ていた遥は、幼馴染に邪魔されたと思い込んだ。屋上の手すりの上に立つ危険な行為をやめさせようとしただけなのに、眼鏡を壊された上に悪態をつかれたのではわりに合わない。

（本当に走り損のくたびれ損だ）

天使の容貌を持つ悪魔が去った屋上で、聖はがくりとうな垂れた。しばらく風に吹かれていたかっただけなのに、放心した後姿は本当に具合が悪そうに見えたらしい。

「ヒー君！」

まずいと思ったが逃げられない。

聖を呼ぶのは、この世の中で一条家の姉弟だけだ。

近づいてくる足音を聞きながら、聖は重いため息をついた。

「ごめん。私、ただの仮病だと……」

「誤らなくてもただの仮病だよ」

背中を向けたまま答えると、真琴の手が伸びてきた。

「本当に？　じゃあ、こっち向いてみて？」

ぐいぐい肩を引っ張られて、仕方なく半分だけ顔を向けると、真琴は目を丸くした。

「どうしたのその眼鏡？　誰かとけんかでもした！？」
力なく笑った聖は、眼鏡のブリッジを持ち上げた。
「落としたはずみでレンズにヒビが入っただけ。みっともないとは思うけど、これをかけていないと、変なものを踏んだり、けつまずいたりして大変なんだ」
ほんの数年前までは両眼とも２．０だったのに、今では立派な『眼鏡君』だ。
「どうってことないさ、車で迎えに来てもらうか、それがダメならタクシーで……」
「あら、一緒に帰ればいいじゃない」
至近距離でにっこりと微笑まれて、真琴が何を考えているかがすぐにわかった。
聖は思わず後ずさったが、細く白い指が伸びてきた。
問答無用で取り上げた眼鏡を、聖の制服の胸ポケットにつっこんでおいてから、真琴は高らかに宣言した。
「転んだりしないように、手をつないであげる」
言い終わった時には、手をつかまれていた。
自宅までの道のりを、真琴に手を引かれて歩くのか。
真琴と手をつなぐのが、いやというわけではないが、状況が状況だけに、ひどく複雑な気分だ。
「あっ、美山君と一条さん！」
「姫とナイトが手をつないでる～！！」

すれ違う生徒たちが大騒ぎしているのに、真琴は平然としている。
一条真琴の不思議さは、自分が周囲から注目されているという認識が全くないことだ。
目とか耳とかに特殊なフィルターでもついているのか、告白されても、美人だと賞賛されても、どうやら冗談にしか聞こえないらしい。

（もっとうぬぼれてもいいのに）

聖は少女の横顔を流し見た。
まっすぐな背中。
凛と引き締まった形の良い口元。
くっきりとした切れ長の目は、目尻が少し上がっていて、神秘的で近寄りがたい印象を受けるけど、笑顔は可憐であどけなく、そのギャップが男たちを魅了する。

サラサラの黒い髪。
すらりとした手足と美しい身のこなし。
これほど恵まれた容姿を持ちながら、真琴自身は自分のことを、勉強以外には何の取り柄もない平凡な人間だと思い込んでいる。

真琴にそう思い込ませているのは、他ならぬ双子の弟だ。
遥は確かに美しい。
天賦の才にも恵まれている。
神に愛されているという意味では、たしかに天使かも知れないが……。

あの日、少女に続いてフェンスをくぐると、そこは花々に彩られた別世界だった。
しばらく進むと、フリルのような西洋シャクナゲの向こうに、変わった形の「離れ」が見えた。

廊下で母屋とつながったそれは、ピアノのためだけに造られた防音室だった。

大きな窓と風に揺れるカーテン。
磨き上げられたグランドピアノ。
部屋の隅に置かれた三人がけのソファーの上で、宗教画から抜け出た天使が眠っていた。

色素の薄い柔らかなくせっ毛。
花びらのような小さな唇。
ミルク色の頬に影を落とした長い睫が、窓から注ぎ込む光で金色に見えた。

「ハル、起きて」

少女に軽く揺さぶられ、天使は軽く身をよじった。
少女に向かって伸ばされる両腕。
薄いまぶたの下から現れた琥珀色の瞳が、少女の肩越しにこちらをみとめるまで、聖は自分の存在すら忘れていた。

「ハル、ヒジリ君よ。ほらっ、美山先生の所に来た男の子」

少女の言葉は、少年のまとう気を、みるみる冷たいものにした。
そっぽを向かれるまでもなく、歓迎されていないことは、すぐにわかった。
ソファーから立ち上がった天使は、不機嫌な面持ちでピアノに歩み寄り、片手でピアノを弾き始めた。

「マコもおいで」
「……でも」

「おいでってば！」

今にも泣き出しそうな顔を向けられて、少女は聖を振り返った。

「ヒジリ君、きらきら星、好き？」

「う、うん」

「じゃあ、聴いてくれる？」

聖は仕方なく頷いた。

本当は『きらきら星』が好きかどうかなんて考えたこともなかったけど、気がつくと、二人が紡ぎ出す音の世界に引き込まれていた。

漆黒の髪の少女は無心にピアノに向かっている。

天使のような少年は、そんな少女に愛しげな眼差しを向けている。

その時、受けた奇妙な感覚を、何と表現したら良いのだろう。

二人だけの音楽。

誰も入り込めない二人の世界。

ばら色に上気した少女の頬から目を逸らし、聖はその場から逃げ出した。

## 5．トライアングル2

「屋上にいるって、どうしてわかった？」
「窓から見えたの」
「窓？」
「会が終わった後で生徒会室のカーテンを開けたのよ。ヒー君、屋上なんかにいるんだもん、あわてちゃった。ねえ、知っていた？あそこの手すりは古くなっていて危ないんですって」

真琴の話に適当に相槌を打ちながら、聖は心の中で胸を撫で下ろした。
聖がいたということは、遥はいなかったということだ。
危ういバランスで手すりの上に立っている弟の姿なんて、真琴には絶対に見せられない。

遥の真琴への執着は、シスコンの域をはるかに超えている。
それなのに、聖が真琴のそばにいることだけは黙認している。
聖はその理由を知っていて、敢えてその策略に乗ってやっている。

一条真琴と美山聖は幼馴染で恋人同士。
生徒会の会長と副会長で、成績はいつも首位争い。
いやでも人目を引く二人が、しょっちゅう一緒にいるわけだから、その間に割り込んでくる勇者は滅多にいない。

だが、事実は全く違っている。
自分で自分にダメだしをしている天然美少女は、聖の気持ちに気付かない。

初めて出会った時から好きだった女の子。

好きの意味は成長とともに変わってきたけど、好きという事実が揺らいだことは一度もない。
長い長い片思いにピリオドを打ちたいのは確かだけど、下手に告白すれば全てを失ってしまいそうで、聖は行動に踏み切れないでいた。

「経験値が足りない」
「何の経験値？」

心の呟きが無意識に口をついて出たようだ。
恋愛、あるいは女性経験と言おうとして、聖ははっと口をつぐんだ。

言葉には反応したものの、真琴はこちらを見てはいなかった。
本人は自覚していないと思うけど、玄関ホールに足を踏み入れるたびに、真琴の歩みは遅くなる。
その瞳は、壁に飾られた八十号の油絵に、吸い寄せられるように固定されてしまうのだ。

昨年の二科展で総理大臣賞を受賞したその作品は、彼女の弟が描いたものだった。
学校側のたっての願いで、今はこの場所に飾られている。

美術部員でもなければ、選択授業で美術を選んでいるわけでもない遥は、いつ、どこで、こんな絵を描いたのか。
受賞してしばらくは、学校中で話題になっていた。

（不思議な絵だ）

芸術の良し悪しにわからぬ聖には、他に評価のしようがない。
キャンバスの下半分はヘドロをぶちまけたような澱んだ色で塗りつぶされていて、よく見れば、半ば埋もれた廃墟の中を、魑魅魍魎が

徘徊する様がよろめくような筆致で描かれている。

しっかりとしたデッサン力を持ちながら、意図的に歪められた危うい線の重なりは、見る者を絶望と狂気に引きずり込もうとするのだが、視線を上方にずらしていくにつれ、描かれた世界は次第に浄化されてゆく。

『エトワール』というタイトルが付けられたこの作品の主役は、キャンバスの最上方から地上に向かって差し伸ばされた白い手だ。ほのかに金色に輝く繊手こそ、この絵の描き手にとって、闇夜を照らすエトワール、つまり、「星」なのだろう。

その星に対峙するように、廃墟の片隅に小さな人影が佇んでいる。身にまとったマントのようなものを風になびかせながら、一心に空を仰いでいる。

「これ、誰の手だと思う？」

「さあ？」

そっけない反応に、聖は思わず苦笑した。

こんなにわかりやすいのに、どうしてわからないのだろう？

ひょっとすると、本当は全てわかっていて、わからないふりをしているだけなのかも知れない。

（ハル、報われないね。でも、僕は何も言わないでおくよ）

それは真琴のためだけど、もちろん私心がないわけじゃない。

「マコは僕のだ」と、幼い声で主張していた遥の切り札は、双子という血のつながりだった。

だが今は、その血のつながりが、二人を隔てる最大の障壁になって

いる。

中学に入学して間もなく、真琴は弟から距離を置き始めた。
遥は姉の気を引こうと必死だったが、ある日を境にその努力を放棄した。

二人の間に何が起こったのか。
付き合いの長い聖には検討がついている。

遥は真琴を愛している。
だから距離を置くことを受け入れた。
危ういバランスをどうにかこうにか保ちながら、双子の姉を遠くから見つめる他はない。

## 6．星は見えない１

人工の風にあおられて、真っ白な羽毛が宙を舞う。
黒のパーティドレスをまとった人気モデルとのツーショットは、ファッション雑誌の表紙を飾るものだと聞かされた。

オフホワイトのタキシードに真紅の薔薇。
ゆるいウェーブのかかった髪をかきあげ、憂いを帯びた眼差しをカメラに向ければ、女性スタッフたちからため息が漏れた。

モデルの仕事はわりの良いアルバイトだ。
そして時には、気まぐれを起こすこともあるわけで……。

「きれいな髪だね」

賞賛の言葉とともに、長い髪を一筋すくって口付けると、少女の頬が薔薇色に染まり、濃いアイシャドーに縁取られた目が潤んでくる。

鳴り続けるシャッター音。
一気に加熱するスタジオの空気。
主役であるはずの女性モデルは、いつしか遥の引き立て役に回っていた。

まっすぐな長い髪が好き。
真琴の髪もそうだから。
どんなに美人でも、スタイルが良くても、真琴に似ていなければ、意味がない。

遥の世界は真琴を中心に回っている。

真琴に似た人、真琴の好きな花、真琴に似合いそうな服、そんなものはいくらでも手に入るのに、真琴だけが手に入らない。

「ハル、君の双子のお姉さんのことだけど……」

撮影終了後、モデル事務所のスカウトマンに真琴のことを持ち出され、遥は聞こえないふりをした。

それは、遥なりの拒絶の意思表示なのに、男はかまわずまくし立てた。

「クライアントから問い合わせがあったんで、悪いとは思ったけど、少し調べさせてもらったんだ。桜明学園の生徒会長なんだって？大女優・藤原麗華の一人娘で、ハルの双子の姉で、日本有数の進学校の生徒会長とくれば、話題性は十分だ。是非一度、事務所に連れてきてくれないかな？」

「モデルなんてムリムリ。マコは僕とは……」

「似てないことは知っているよ」

ドアノブを回しかけていた遥の手が止まる。

そのことを自分に都合よく解釈した男は、なおも得々と話し始めた。

「写真があるんだ。すごい美少女なんで驚いた。今時珍しい清楚な感じで、これなら十分……」

「どこ？」

「は？」

「写真、どこ！」

相手の剣幕に圧されたように、男はあわてて上着のポケットをさぐり始めた。

出てきた写真は全部で三枚。
遥はそれらを残らず奪い取り、検分するように一瞥した後、持っていたカバンの中に滑り込ませた。

「あなた……矢崎さんだったけ？　モデル事務所の社員だからって、隠し撮りした女子高生の写真を持ち歩くなんてことが、許されると思ってるの？　肖像権って知ってるよね？」

やわらかな口調だったが、瞳には明らかな敵意がこもっている。

「ねえ、真琴を、一体、どうするつもり？」

「ど、どうもしない。た、ただのスカウトだよ。あっ、ひょっとして、ハルって、お姉さんっ子なの？　まあ、無理もないか。美人だし、君たち全然似てないし、ちょっとは変な気になっても……」

「変な気になったのは、あなたでしょ」

一気に距離をつめられて、矢崎は言葉を失った。
ぞっとするような暗いオーラが少年の全身を包んでいる。

「矢崎さんがお気に入りのモデルに手を出していることは知ってるよ。　僕には関係ないことだから、黙っていてあげるつもりだったけど……」

悪魔的な微笑を向けられて、矢崎の顔が青ざめた。
多少気まぐれで、尊大な所はあるものの、少年がこんな態度を見せるのは始めてだった。

「た、ただの高校生に、な、何が……」

「何ができるか試してみる？」

ポケットから取り出した携帯電話を、親指だけで器用に操った少年は、四秒ほどの沈黙の後、ごく自然に話し始めた。

「ハルです。今日はありがとうございました。実は相談があって……。同じモデルクラブに所属する女の子が、仕事の紹介と引き換えに事務所の人から……ええ、年は十六歳。警察にはまだ……」

「やめろっ！　ど、どこへかけている！？」

「はい、はい、じゃあ、後ほど……」

思わせぶりな言葉で会話を締めくくった遥は、肩に伸びてきた男の手を、無造作に払いのけた。

「電話の相手は、さっきまで一緒だったファッション雑誌の編集者。あそこって、母体はかなり大手の出版社だから、こういう情報は歓迎みたい。三十分もすれば、週刊誌の記者がここへ押しかけてくるんじゃないかな？」

「う、嘘だ！」

「うん、嘘。これは警告。何をしようとあなたの勝手だけど、真琴に近づくことだけは、絶対に許さないってこと」

動揺のあまり尻餅をついた矢崎を引っ張り起こしながら、遥は無邪気に微笑んだ。

「じゃあ、お疲れ様。バイト代は振り込んどいてね」

扉が閉まる音でようやく我に返った矢崎は、そばにあったパイプ椅子を引き寄せ腰掛けた。

「あれは何だ。まるで天使の皮をかぶった化け物じゃないか」

吐き出す息とともに広げた手のひらには、じっとりと汗をかいていた。

## 7．星は見えない２

夢の中で、遥は空を見上げていた。
奈落を逆さにしたような黒い空。
どんなに目を凝らしても月も星も見えない。
足元に広がる水面もまた、夜闇を映して真っ黒だった。

「マコト」

弱々しい声が闇を震わせる。

「マコト！」

浅いはずの沼に身体がゆっくりと沈み込む。
膝から、腰へ、そして胸へ……。
そう、ここは、罪人を埋葬するための底なし沼なのだ。

これは夢だと言い聞かせても、泥に押さえつけられた胸が、だんだんと苦しくなってくる。

「マコ、助けて！」

叫んだ口から泥と水とが流れ込み、伸ばした腕が、空しく何度も空を切る。

「ハル君？」

細い指先が、遥の髪を優しくかきあげた。
夢うつつのまま開いた唇は、柔らかなキスでふさがれた。

するりと滑り込んできた柔らかい舌の感触。
なじみのない体温。

（エリカって言ったっけ？）

相手の名前を辛うじて思い出せたことに、ほっとした。
お客の名前を忘れてしまうのは、さすがにルール違反だろう。

「私、こんなの初めて」
「満足できなかったんなら、払い戻しするけど」
「ううん、そうじゃなくて……」
「ねえ、もう、帰っていい？」

言いながら、遥は上半身を持ち上げた。
薄い筋肉のはりついた裸身は雪のように白い。
しなやかな背中には純白の羽根が似合いそうだ。

眩しそうに少年を見つめていたエリカは、思い出したように薄い上掛けを引き寄せた。
部屋にただよう濃密な香りは、ここで行われた行為を何よりも雄弁に物語っている。

一条遥と付き合いたければ、彼の時間をお金で買えばいい。
そんな噂を耳にしたことはあったけど、ただの噂だと思っていた。

刹那的で、気まぐれで、時として辛らつな美貌の少年。
遥の日本人離れした容姿は、母親で女優でもある藤原麗華の曾祖母が、フランス人であることに由来している。

モデルとしてだけでなく、ピアノや絵画など、あらゆる方面で天才

の名を欲しいままにしている少年が、お小遣い程度のわずかなお金で動くだなんて、一体、誰が信じるだろう。

「撮影の時、髪をほめてくれたよね？」

制服のボタンとめていた少年が、不思議そうにこちらを流し見た。

「ひょっとしたら、好かれているのかなって思ったの」

「嫌いじゃないよ」

「でも、好きでもないんでしょ？　デートに誘って、お金を要求されたのって、生まれて初めて」

「そう？　ごめんね？」

少年がちらりと微笑んだ。

くやしいけど、見惚れるほどに美しい。

裸身にまとった上掛けを落とした少女は、少年の首に自分の腕を巻きつけた。

「追加料金を払ったら、延長もあり？」

少年はかすかに苦笑したが、答える代わりに、長い黒髪と一緒に目の前の裸身を抱き寄せた。

時刻は午前一時四十分。

タクシーの後部座席に身を沈め、カバンから写真を取り出すと、運転手が車内灯を付けてくれた。

制服姿の真琴が写真の中で微笑んでいる。

誰に向かって微笑んでいるのだろう？

そっと唇を寄せると、バックミラーごしにこちらを見ていたらしい

運転手が声をかけてきた。

「恋人ですか？」

「片思い」

「意外だな、お客さんみたいな美形に告白されて、断る人なんているんですね」

「キスしようとしたら、思い切り突き飛ばされた。できるものなら、別の人間になりたいよ」

「ほう、それはまた……」

車内が再び暗くなり、遥は再び闇の中に投げ出された。

車窓から見上げた空にも、やっぱり星は見えなかった。

## 8．カモミール1

つつましやかなノックの音。

ハーブティの香りとともに部屋に足を踏み入れた青年は、机につっぷしたまま、うたたねをしている少女を見て微笑んだ。

「真琴さん」

「……」

「真琴さん」

「……」

「マコちゃん」

ぱっと頭を上げた少女は、きょろきょろと視線を動かした。

長身を折り曲げるようにして、必死で笑いをかみ殺している青年の存在に気付くこともなく、机の下を覗き込み、引き出しを下から順番に開けてゆく。

こらえきれなくなった青年が噴き出すと、少女はようやく振り返り、切れ長の目を見開いた。

「な、な、直己さん！」

「机の下をご覧になっていたようですが、小人でも飼ってらっしゃるのですか？」

羞恥で赤くなっていた少女の顔がますます赤くなる。

カップを載せたお盆を片手で持ち、もう一方の手でドアを押さえた長身痩躯の青年、橘直己(たちばななおみ)は、この家の住み込みの使用人だ。
今から三年前、家政婦協会の推薦状を携えて来た彼は、のほほんとした雰囲気とは裏腹に、天涯孤独な身の上だった。

真琴と直己の年の差は7歳。
初めて会った時、真琴は十四歳だったから、直己は二十一歳だ。

思春期の少女がいる家に、若い独身の男を住み込みで雇うというのは、いかがなものか。
普通はあり得ないと思うのだが、その日、珍しく家にいた母親が、ひと目で彼を気に入ってしまい、その場で採用を決めてしまった。

「彼って、何だか癒されると思わない？」
その時は、母親の言葉に同意したわけではなかったが、真琴がそれでも母の言葉を受け入れたのは、遥と二人きりで過ごす夜が怖かったからだ。

仕事で飛びまわっている母親は、滅多に家に戻らない。
その一方で、自分を見つめる弟の瞳は、焦がれるような熱を帯びてゆく。
一触即発のような、家の中の空気を何とかしてくれるなら、若い男だろうと、年寄りだろうと、真琴は一向に構わなかった。

真琴の予想を裏切って、遥は何も言わなかった。
それどころか、直己がこの家に住み込むようになってから、真琴から目に見えて距離を置き始めた。

「遥君のことが心配なんですね？」
静かな声で訊ねられ、真琴は無言で目を伏せた。

その手には、ケータイ電話が握られている。

「大丈夫ですよ」

手渡されたカップから、ふわりと立ちのぼるカモミールの香り。

顔をあげると、青年と目が合った。

青年の瞳は、いつだって、春の海のように凪いでいる。

「これを飲んで、ぐっすりお休み下さい。明日の朝には、遥さんもちゃんと帰ってきていますから」

「どうしてわかるの？」

真琴が問い詰めると、青年は困ったように微笑んだ。

けれども真琴にはわかっていた。

直己が帰ってくるというと、遥は本当に帰ってくる。

理由はわからないが、直己の言葉は恐ろしくよく当たるのだ。

ひょろりとした長身。

半袖のポロシャツにジーンズ。

無造作な髪。

ユニフォーム代わりのデニムのエプロン。

遥や聖に比べれば、無個性であることが個性のような青年だが、ぱっと見、印象の薄いその顔は、よく見れば上品に整っている。

「これを飲み終わるまで、そばにいてくれる？」

「ええ、もちろん」

頷きながらも、青年はさりげなく一歩後ずさる。

常に保たれる一定の距離。

真琴自身が動かない限り、この距離が縮まることはない。

じっと相手の顔を見ていると、青年は困ったように目を逸らした。
この時間がもっと長く続くといい。

でも、どうしてそう思うのだろう？
わざとゆっくりとお茶を飲みながら、真琴は考えることを放棄した。

## 9．カモミール2

「ここで降ろして」
「真っ暗ですよ」
「平気。ここからは歩くよ。いつもそうしているんだ」

閑静な高級住宅街は深い眠りの中にある。
支払いを済ませてタクシーを降りると、本当に辺りは真っ暗だった。
なだらかな坂をのぼっていくうちに、自然と歌が口をついて出た。
真琴は昔から怖がりで、暗闇は大の苦手だ。
幼い頃、二人して夜道を歩く時は、しっかりと手をつないで、歌を歌ったりしたものだ。

Ｔｗｉｎｋｌｅ，ｔｗｉｎｋｌｅ，ｌｉｔｔｌｅ ｓｔａｒ，
（きらきら輝く小さな星よ）
Ｈｏｗ Ｉ ｗｏｎｄｅｒ ｗｈａｔ ｙｏｕ ａｒｅ！
（あなたはなあに？）

Ｕｐ ａｂｏｖｅ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ ｓｏ ｈｉｇｈ，
（この世界のはるかな高み）
Ｌｉｋｅ ａ ｄｉａｍｏｎｄ ｉｎ ｔｈｅ ｓｋｙ.
（空に浮かんだダイヤモンドのように）

Ｔｗｉｎｋｌｅ，ｔｗｉｎｋｌｅ，ｌｉｔｔｌｅ ｓｔａｒ，
（きらきら輝く小さな星よ）
Ｈｏｗ Ｉ ｗｏｎｄｅｒ ｗｈａｔ ｙｏｕ ａｒｅ！
（あなたはなあに？）

幼い頃は良かった。

互いが互いを好きでいることを非難されることなどなかったし、けんかをしても、ピアノのある場所ならピアノの連弾で、ピアノがなければ一緒に歌を歌ったりして、いつでも簡単に仲直りできた。

「きらきら星」が最後のフレーズにさしかかった所で、二つの屋敷が見えてきた。

一方は時代劇にでも出てきそうな日本家屋。

そしてもう一方の白亜の洋館は、こんな時間にも関わらず、門灯には煌々と明かりが灯っていた。

正面から入る気はもとよりなかったから、フェンスを軽々と飛び越えた遥は、庭から直接出入りできる「離れ」の扉に手をかけた。

斜光カーテンの隙間から淡い明かりが漏れている。

鍵を開けるまでもなく、鍵はかかっていなかった。

「朝帰りですね」

いきなり声をかけられて、遥はぎくりと動きを止めた。

予想はしていたが、絞った明かりの中で待ち構えていたのは、橘直己だった。

「まあ、もう遅いことですし、お説教はやめておきましょう。ただ、携帯電話にはちゃんと出て下さいね。真琴さんが心配しますから」

言われてはじめて携帯の着信に気がついた。

双子の姉が、深夜になっても帰宅しない弟を心配するのは、当たり前かも知れないが、遥の胸のどこかにぽっと小さな明かりがともる。

「マコは？」
「お自身のお部屋に……もう、おやすみだと思いますが」
「そうか、そうだよね。ありがとう」
遥はほっと息を吐き出し、部屋のソファーに腰掛けた。
「バイト先のスタジオでモデルの女の子に誘われたんだ。三万円って言ったら、驚いてた」
扉の鍵をかけていた青年が、背中越しに振り向く気配がした。
「驚いていたけど、だったらやめるとは言わなかったよ。軽いよね。僕も彼女も。ああいう子を好きになれたらいいのにね」
「良くはないでしょう。そんなお手軽な生き方など、おもしろくもなんともない」
遥は頬杖をついたまま、直己の方を流し見た。
家事をそつなくこなす青年は、穏やかな気を身にまとい、細かな気配りも忘れない。
いまどき珍しい、絵に描いたような好青年。
でも、それだけではないことに、遥はとうに気付いている。
「さあ、もう、おやすみ下さい。成績のことはともかくとして、学校にだけはちゃんと行って頂かなくては」
「成績のことは、ともかくって、どういうこと？」
「わざと成績を下げている人に、何を言っても無駄ということです。今さらやめろとは申しませんが、絶対にばれないようにして下さいね。真琴さんの落ち込んだ顔を見るのは、私だっていやですから」

姉が幼馴染の少年と首位争いをしているのに対し、遥の成績は赤点すれすれの低空飛行を続けている。
その理由は誰一人知らないはずなのに……。

「どうして知っているの！？」
遥ははじかれたようにソファーから立ち上がり、青年に詰め寄った。

「ただの勘ですよ。長く生きていますから」
「二十四歳で長生きとは言わない」
「まあそうですけど、ほらっ、この方に比べれば……」

青年が指差したのは、グランドピアノの上に置かれた写真たてだった。

くせのない漆黒の髪。
涼やかな切れ長の目。
賞状とトロフィーを手にしたタキシード姿の青年が、ピアノの前で照れくさそうに微笑んでいる。

青年の名は木島武彦。
将来を嘱望されていながら、二十一歳の若さで世を去った、遥と真琴の父親だ。
今、初めてその存在に気づいたように、遥は写真を凝視した。

## 10．星々の思い1

なぜ彼は、死ななければならなかったのか。
なぜ彼女は、死ななければならなかったのか。

この世は理不尽なことばかりだ。
二人を陥れたあの女を、地獄に突き落としてやるつもりだった。

「似てないね」

真下広夢は、顎の下で細い指を組み合わせたまま、大きな瞳をさらに大きく見開いて、真琴の顔をまじまじと凝視した。
真琴は居心地の悪い思いで曖昧に頷いた。
落とした視線の先には、広夢が家から持って来たファッション雑誌が置かれている。

今月の表紙を飾っているのは、タキシード姿の弟だった。
確かに、同じ血が流れているとは思えない。
黒いドレスをまとっ美少女に、真紅のバラを差し出す様は、ため息が出るほどエレガントだ。

「広夢、何を言ってるの？　二卵性双生児なんだから似てないのが普通なの！」
真琴の背後からにゅっと腕が伸びてきて、ファッション雑誌を取り上げた。
振り返ると、部活に行ったはずの木下雅美が立っていた。

「高校二年にもなって、そんなことも知らないの？」
「な、何よ、その言い方！」

甲高い少女の声に、放課後の喧騒がぴたりとやんだ。
真下広夢はこの学園の理事長の孫娘。
木下雅美は女子剣道部の副主将。
両者が本気でやりあえば、とんでもないことになる。

「少し勉強ができるからって偉そうに！」
「私は当たり前のことを言っただけよ。そんなことより、スポーツ特待生の私より、成績が悪いことの方が問題だと思うけど？」

女の子としての武装を完璧に固めた広夢と、髪の短いボーイッシュな雅美とは、見事な好対照をなしている。
外見的には正反対の二人だが、歯に衣着せぬもの言いだけは共通していた。

「大きなお世話！　それ以上失礼なことを言ったら、おじい様にお願いして、学校にいられなくしてやるんだから！」
「はん、できるものなら、やってみれば？」
「はい、はい、そこまで！」

放課後の教室で突発的に始まった決闘は、果てしなく泥沼化するかに思えたが、真琴の鶴の一声でいとも簡単に終息した。

「ハルは母親似で私は父親似。似ていなくても双子は双子。そんなことより、雅美、今日は部活に出ないんだよね？　一緒に学食でお茶しよっか？」

真琴ににっこりと微笑まれて、二人同時に頷いた。
冷静になって周囲を見回せば、教室中の視線が自分たちに集中していることが、いたたまれなくもある。

少し奇妙な友人関係だが、三人が親友であることに変わりはない。
真下広夢は一条遥の大ファンで、私設ファンクラブの会長でもある。
木下雅美は部活に燃えるスポ根少女で、男生徒より女生徒にファンが多い。

一年の時に同じクラスになり、タイプは全く違うのに、真琴を間に挟んで、気がつけば親しくなっていた。
二年になってクラスが別々になった今も、ローテーションでそれぞれのクラスを移動しながら、一緒に昼食をとる仲だ。

「私、遥君の大ファンでしょ？　真琴と遥君が似ていたらいいなあ、なんて、ついね」

広夢は頬を染め、雅美から取り戻した雑誌を後生大事に抱きしめた。

「不毛すぎる。そんなに好きなら、本人に直接言えばいいのに」
「そんなの無理よ、ふられるに決まってるもの！」

「戦う前に負けを宣言するなんて、最悪」
「雅美、ひどいよ！」

肩を竦めた親友を、広夢は涙目でにらみつけた。

「ハルの話は、もういいじゃない」

弟の話題で二人が言い合うのはたまらない。
真琴が二人の間に割って入ると、雅美はきっぱりと首を振り、くるりと広夢に向き直った。

「直接言えないなら、手紙を書けばいいんじゃない？　一条遥の双子の姉がここにいるんだから、本人の手に渡ることだけは間違いないし、いまどきラブレターなんて珍しいから、インパクトあるかもよ」

目で同意を求められ、真琴は表情をこわばらせた。
いつの間にか、さっきまでいやがっていた広夢まで、期待に満ちた目をこちらに向けている。

真下広夢は砂糖菓子のような女の子だ。
少しわがままな所も、コケティッシュな魅力になっている。
こぼれそうに大きな瞳に涙をためれば、誰もが手を差し伸べるだろう。

（きっと遥も、例外じゃない）

「ね、真琴、ハル君、彼女、いないんだよね！？　一生のお願いだから協力してよ！」
「……私……」
続く言葉が出てこない。
さっきまで何ともなかったのに、急に気分が悪くなり、胃がきりきりと痛みだした。

（どうしたんだろう？）

睡眠不足のせいだろうか。
そんなことより、広夢は親友なんだから、協力しなくちゃ。
広夢は可愛いから、遥だって……。

「真琴、なんか、顔色悪いよ」

最後に聞こえたのは、心配そうな雅美の声だった。

「だ、大丈夫……」

苦労して笑おうとしたが、うまく笑えない。

立ち上がろうとした途端、真琴の上半身がぐらりとかしいだ。

何が起こったのか、真琴自身にもわからなかった。

## 11．星々の思い2

稽古着姿で保健室に現れた少年は、ひそとも音とたてることなく、眠る少女を見つめている。
養護教諭が不在で心配なのはわかるけど、真剣な横顔は姫を守るナイトそのものだ。

（私たちって、おじゃま虫よね？）

所在なげに佇んでいた二人の少女は、互いに顔を見合わせ、足音を忍ばせて保健室を後にした。

「いいなあ、真琴は」

下駄箱まで来た所で、広夢はうっとりと足を止め、黄昏色の空に目を細めた。
淡い色のメイクも、きれいにカールした長い髪も、明らかに校則違反だけど、あまりにも似合っているせいか、それともこの少女が理事長に激愛されていることが学校中に知れ渡っているせいか、注意する者は誰もいない。

「だって、あの美山君だよ？　美山病院の跡取りで、顔良し、頭良し、性格良し、おまけにスポーツもできて、欠点なんかどこにもないスーパーマンなんだもの」
「欠点のない人間なんていないと思うけど？」
「そんなことないもん！」

勢いよくこちらを振り返った少女は、サクランボのような唇を尖らせた。

「雅美、今日、めちゃくちゃ機嫌悪い！　私にあたるのはともかくとして、美山君の悪口はやめてよね？！　彼は完璧なナイトなのよ。欠点なんかあるはずないじゃない！」

ぽかんと口を開けた雅美の顔が微妙に歪む。
天真爛漫なのはいいけど、この短絡的な性格は、もう少し何とかならないものか。

「広夢、あんた本当に一条遥のファンなの？」
「そうよ！」

返事はすぐに返ってきた。
ぱっと頬を染めた所から察するに、やはり本命は弟の方ようだ。

「私だって、真琴が……」
「えっ、なあに？」
「ううん、何でもない。学食で新作ケーキを食べるのはまたにしよう？　私、今からでも部活に出るから」

「ええ、そんな！　そりゃあ、美山君は部活に出てたみたいだけど、基本、二年は学力テストでお休みじゃない！」と、派手に落胆してみせた少女は、次の瞬間には、すかさず交換条件を出してきた。
美山聖のケータイ番号を教えろというのだ。

「雅美が美山君のケータイに連絡したのは驚きだったけど、そういえば、美山君と雅美って、同じ剣道部だものね」

雅美の眉が無意識に吊りあがる。
この子の頭の中は一体どうなっているのだろう？

いそいそと携帯電話を取り出した友に、雅美はきっぱりと背を向けた。

ケータイ番号を聞き出すのに、どれだけ苦労したかも知らないくせに。
電話をかけるのに、どれだけドキドキしたかも知らないくせに。
稽古着姿のまま、汗まみれで現れた美山聖が、こちらを一瞥もしないで真琴を抱き上げた時、どれだけ悲しかったかも知らないくせに。

私も真琴が羨ましい。
でも、そんな風に思う自分が許せない。

真琴や広夢みたいに裕福な家の子じゃない。
真琴みたいに美人でもないし、広夢みたいに可愛くもない。
でも、だからこそ、プライドだけは、失いたくなかった。

「雅美、どうして怒ってるの？」
「怒ってなんか……」

「ひょっとして、美山君のことが好きなんじゃ……」
「まさか！」と必要以上に大声で叫んだ時、救いのチャイムが鳴りだした。

部活の残り時間はあと十五分。
「怒ってないけど、焦ってるの！」
こわばった笑顔でそれだけ言ってから、雅美は武道場に向かって駆け出した。

颯爽と駆けてゆく少女の後姿に、生徒たちが見とれている。
雅美のファンは男女ともに少なくない。

だが、前しか見ていない当の本人が、その視線に気づいたことは一度もなかった。

## 12．星々の思い3

甘い香りに目をやると、生垣を飾る梔子が、純白の花弁を広げていた。
毎日通っている道なのに、今さらのようにその存在に目を奪われた。

「ヒー君……ごめんね」
真琴は小さく呟いて、聖の制服の袖を軽く指先で引っ張った。

どこか子供っぽいそのしぐさが、無意識の媚態と映るのは、甘くただよう花の香りのせいなのか。
相手の歩調に合わせてゆっくり歩きながら、聖は白い花から目を逸らした。

「謝るようなことじゃないだろ？　真琴を起こさなかったのは僕の勝手だし、それに、本当に欲しいのは、謝罪の言葉なんかじゃないんだけど？」

欲しい言葉をもらえないことはわかっている。
それでも聖は、少し緊張した面持ちで、目の前の少女をじっと見つめた。
案の定、真剣な表情でしばし考え込んだ幼馴染が、はたと思いついたように口にしたのは、「ありがとう」の一言だった。

こんなやりとりを、いつまで続ければ良いのだろう？
二人分のカバンを小脇に抱えた少年は、瞳に浮かんだ落胆を隠すため、眼鏡のブリッジを押し上げた。

いつもなら、すぐに気持ちを切り替えられるのに、今日に限ってそ

れができないのは、真琴が倒れた時の状況を、二人の少女から聞かされたからに違いない。

倒れた原因は、極度の睡眠不足からくる疲労。
でも本当は、そんなことじゃない。

「いつも言っているけど、深夜勉強はほどほどに。真琴が倒れたって聞かされて、こっちは心臓が止まりそうだったんだから」
ごめんねと、また謝りそうになって、真琴は言葉を飲み込んだ。

顔にも態度にも決して出さないが、聖はいつも忙しい。
週の半分は予備校で、残りの半分は部活と生徒会。
それなのに今日は部活を休んだ上、真琴が目を覚ますまで、ずっとそばにいてくれた。

「ヒー君には迷惑かけてばかりだね。これからは、ヒー君に連絡しないよう、雅美にも、ちゃんと言っておくから」
「いいんだ」
「え？」
「真琴に何かあったら、誰よりも先に連絡して欲しいって、僕が木下に頼んだんだから」

きょとんとした顔を向けられて、聖は思わず苦笑した。
もしもこれがわざとなら、失恋はもはや決定的だ。

（真下のラブレターを、ハルに渡すのが、そんなにいやだった？）

真顔で問えば、真琴は何と答えるだろう。
危うい均衡を崩すのは簡単だ。
はっきりと言葉にすればいい。

聖が足を止めると、真琴も足をとめ、気遣わしげな瞳を向けてきた。
夜風が運んでくる甘い香り。
これは花の香りなのか、それとも少女の香りなのか。

（もう限界だ）

衝動に突き動かされるまま、聖は真琴を抱きしめた。
滑り落ちたカバンが、二つとも地面に転がった。

「ヒー君、どうしたの？」

どうしてわからないのだろう？
聖は唇をかみしめた。

「ひょっとして、ヒー君も気分が悪くなった？　家まで歩けそう？」

「違うんだ、真琴、俺は……」

「真琴さん」

聖の声にもう一つの声が重なった。
ぎくりとして振り返った聖の目に映ったのは、長身痩躯のシルエット。
立ち上がった影法師のようにも見えるそれは、一条家に雇われている住み込みの青年だった。

## 13．星々の思い４

真琴の名を呼びはしたものの、青年は困惑しているようだった。

「あの、お邪魔でした？」

「どうして？　ちょうど良かった。あのね、ヒー君がね……」

「あ、そうだ！」

真琴を言葉を遮って、青年がわざとらしく声を張り上げた。

「玄関の鍵をうっかりかけ忘れていました。失礼して先に帰らせて頂きます。あの、聖さん、ご迷惑をおかけしたついでに、真琴さんを自宅まで送って差し上げて頂けませんか？」

相手の返事も待たずに、回れ右して駆け出した青年を追いかけて、少女は今にも走り出しそうだ。

それをどうにか掴まえた聖は、辛うじて体制を立て直した。

「心配しなくても元気だよ。具合が悪くなって、ひっくり返ったのは真琴の方だろ！？」

心配するより、気づいて欲しい。

傍観者でい続けることには、もう耐えられない。

「本当に気づかないの？　それとも気づいているのに、気づかないふりをしているの？　僕は真琴が好きだ。初めて会った時から好きだった。いつかは気づいてくれると思っていたのに……」

真琴は表情をなくしていた。

心がこの状況を受け入れることを拒否しているのかも知れない。

「僕とは付き合えない？」
「そんなこと……」
少女の瞳がゆらゆらと揺れている。
それでも、潤みを帯びた漆黒の瞳には、確かに聖が映っていた。
「ヒー君のことは大好きだけど、付き合うなんて、考えたことなくて」
高校二年生にもなって、その答えはないだろう？
つっこみを入れたかったが、我慢した。
真琴はしっかりしているわりに幼いところがあって、そういうところも含めて好きだから、黙認する他はない。
「それに、ヒー君、すごくもてるんだよ。私となんて、全然釣り合わないと思うけど？」
トンチンカンな言葉に、困惑して相手の顔を見た。
真琴は自分を知らなすぎる。
自分を低く見積もるのも、いい加減にして欲しい。
「他の子を好きになっていたら、とっくに両思いになっている。少なくとも十年以上も思い続けたりはしない。で、返事はいつ頃もらえそう？　他に好きなやつがいるなら諦めるけど、そうじゃなければ、諦めない」
情けなさもここまでくれば、あとは開き直るしかない。
「でも、遥が……」
聖は天を仰ぎたくなった。
誰かと付き合うのに、双子の弟のことを気にすることの異常さに、

真琴は全く気付いていない。

「大丈夫だよ。今より悪くは絶対にならない。むしろ彼氏ができたとおおっぴらに公言した方がうまくいく。嘘だと思うなら試してみればいい」

それ以上の説明は不要だろう。
お互い以上に大切な誰かができれば、普通の姉と弟に戻れるはずだ。
そうすれば、誰も不幸にならない。
姉と弟の絆も、壊れることはない。

「ふーん、ナイトが王子に格上げ？」

嘲るような声を聞いた時、聖は愕然と息をのんだ。
ああ今日は、とんでもない厄日に違いない。

ポツリと佇立する外灯の下。
天使のように美しい少年は、二人に向かってひらひらと手を振った。

## １４．天才と狂気１

目だけで人が殺せるなら、息の根を止められていたに違いない。
聖は半ば無意識に、真琴を背後にかばいこんだ。

「僕って、悪役？　ひょっとして大切なお姫様をさらわれるとか思っているわけ？　念のために言っておくけど、マコと僕は双子の姉弟だ」

外灯の淡い光の中で、遥は微笑を浮かべていた。
アルカイックな微笑みは今にも砕け散りそうで、ひび割れた仮面を思わせる。

「そうだよ。君たちは姉弟だ。その事実はこの先もずっと変わらない」

聖は遥の言葉を繰り返しただけだけど、こめられた意味は全く違う。
琥珀色の瞳に、一瞬だけ浮かんだ悲哀と絶望。
それを強引に拭い去り、遥は身体を折り曲げるようにして笑い出した。

「ははっ！　ははははは……はは……」

虚ろな笑い声は、狂人のそれと少しも変わらない。
表情は髪に隠れて見えなかったけど、外灯をつかんだ手は震えていた。

「ハル」

それは、うっかり聞き漏らしてしまいそうなぐらい小さな声だったけど、遥はぴたりと笑うのをやめ、吸い寄せられるように顔を上げた。
外灯に照らされた頬が、涙で濡れている。

「一緒に帰ろう？」

姉の言葉にこくりと頷いた時、燃えるような狂気は、嘘のように消えていた。
琥珀のような瞳は、もう真琴しか映さない。
すがるように姉を見つめる表情は、幼い子供のようだった。

（まるで物語のハッピーエンドみたいだ）

悪役は遥ではなく、自分の方だったのかも知れない。
心の中でぼんやりとそう思った時、ようやく真琴と目があった。

「ヒー君、私で良ければ」
わけがわからず、目を見開いた。

「さっきの返事」と言われても、どう反応して良いかわからない。
「本気？」
こんな状況で真琴が冗談を口にするとは思えないけど、それでも疑問が口を突いて出た。

遥はすがりつくように姉の背中に腕を回したまま、彫像のように動かない。
いたわるように抱きあう美しい姉弟。
ただよう花の香り。
純白の清楚な花なのに、誘うような甘酸っぱい香りが夜気の中で艶

めいて、頭が少しくらくらした。

## 15．天才と狂気2

遥は真琴の手を離さなかった。
家に着くまでずっと姉の手を握り続けていた。

リモコンのボタンを押すと、幼馴染の少年が、テレビのディスプレイに映っていた。
マイナーなピアノコンクールなんて、通常はテレビで放映されるようなものじゃない。
でも今年は、藤原麗華の息子で、モデルでもあり、音楽家としても、作曲家としても、さらには絵の世界でも将来を嘱望されている一条遥が参戦したことで、あり得ない数の報道陣が会場に詰めかけていた。

一位の副賞は百万円。
裕福な家の一人息子が、実は賞金目当てでコンクールに参加していると知ったら、誰もが目を剥くに違いない。

日本人離れした自分のルックスを、遥は密かに嫌っている。
自分が脚光を浴びれば浴びるほど、姉との距離が遠くなってゆくことも知っている。
それなのに、中学生の頃からモデルのバイトを続けているのも、出たくもないコンクールに自ら進んで参加するのも、金めあてに他ならない。

「一生働かなくても生きていけるように、なるべく多くのお金を、なるべく早く貯めたいんだ」

大きなキャンバスに油絵の具をぶちまけながら、遥はそんなことを

言っていた。

遥と貯金。
遥と将来設計。
これ以上、奇妙な組み合わせもないだろう。

「そんな不純な動機でその絵をコンクールに出すつもり？」
「不純な動機だなんて決め付けないでよ。純粋とか不純とか、正しいとか間違っているとか、そんなこと、どうでもいいだろ？」

どうでも良くないと思うけど、言い返すのはやめておいた。
屋上に来た目的は、答えの出ない問答をすることでも、芸術を鑑賞するためでもない。
聖は手すりに歩み寄り、わざと強引に揺すってみせた。

「前にも言ったと思うけど、手すりの一部が古くなって腐食しているんだ。こんな所で絵なんか描いてたら……」
「この絵と一緒に地上に真っ逆さま？」
遥はくくっと笑い、キャンバスを抱えたまま、手すりから身を乗り出した。

「おい、やめろよ！　冗談で言ってるんじゃないんだから！」

取り上げたキャンバスには、白い手が描かれていた。
指の隙間からこぼれ落ちる花びらが、累々と横たわる無数の死体の上に降り積もってゆく。
きれいで幻想的な作品だけど、まともじゃない。
こういう絵を描く人間の精神構造は、一体、どうなっているのだろう。

「この死体の中に、俺がいるんじゃないか」
冗談っぽく告げると、遥は不思議そうな顔をした。
「だって、邪魔だろう？」
「どうして？　そんなことないよ」
微笑した遥は、静かに空を仰ぎ見た。
今日の天気予報は「晴れ時々曇り一時にわか雨」。
重く垂れ込めた雲が太陽を覆い隠し、今にも雨が降り出しそうだ。
「ヒー君と付き合うようになってから、マコは僕を避けなくなったからね」
「避けるようなこと、したんだ」
聞き流されるかと思ったけど、遥は小さくうなずいた。
「ピアノのある離れの部屋で、抱きしめて、キスしようとして……。自分でもよくわからないんだ。どうしてあんな馬鹿なことをしたんだろう？」
風をはらんだ白いシャツの端に、油絵具がついていた。
黒みがかった赤い色は、点々と散る血痕のようだ。
こんな色ばかり塗りたくっているから、おかしくなるんだ。
力なく垂れた少年の手から、聖は絵筆を取り上げた。
「それからしばらくして、離れの部屋に行ったら、ピアノの上に父親の写真が飾られていた。マコが置いたんだ。笑っちゃったよ。僕たちが生まれる前に死んだ男だよ。忘れるともなく忘れていたけど、マコにすごく似てるんだ」

その写真なら、聖も見たことがある。
漆黒の髪と瞳をした青年は、東京芸大の音楽科を主席で卒業し、奨学生としてアメリカへ渡ったその日、何者かによって殺害された。
麗子に妊娠がわかったのはその後で、結婚だってしていない。
堕ろすことだってできたのに、麗華はたった一人で、二人の子供を育ててきた。

「マコが嫌がることはもうしない。でも、心はどうにもならないだろう？　こんな風に思われることすら、疎ましいというのなら、僕は消えていなくなる」

あの言葉は本気だったのか、それと冗談だったのか。

液晶画面の中で、黒のタキシードをまとった遥が、舞台の中央に進み出る。
満場の拍手。
貴公子のような姿にうっとりと見入る審査員たち。
みなの視線を一身に浴びながら、賞金のことでも考えているのだろうか。
涼しい顔で弾き始めたのは、難曲中の難曲とされるショパンのエチュードＯＰ．２５－６だった。

そう言えば、数日前、放課後の音楽室で、遥はこの曲を弾いていた。
音楽特待生たちが、超絶技巧だと大騒ぎしていたけど、あの時だって、今弾いている速さの半分ぐらいじゃなかったと思う。

真琴がピアノを投げ出してしまった気持ちがよくわかる。
自分だって、こんな弟がいたら堪らない。

「百万円は決まりだな」

だが、わからないことがある。

一生働かなくても生きていけるぐらいの金が貯まったら、遥は何をするつもりなのだろう？

## 16．秘密1

よく手入れされた庭で、ラベンダーとローズマリーが競うように咲いていた。
木蓮の木陰に置かれた手作りのベンチに腰かけて、少女が気持ち良さそうに眠っている。
生成りのワンピースにデニムのハーフパンツ。
素足に履いたシンプルなミュールに一瞬だけ止まったてんとう虫。

きれいな真琴。
可愛い真琴。
大好きな真琴。
僕だけの……。

ハーブの爽やかな香りの中で、少年は少女の前にかがみ込み、淡い色のまつげを伏せる。
触れるか触れないかの淡い口付け。
それからゆっくりと後ずさり、囁くように名を呼んだ。

「マコ」
少女は目を閉じたままだった。
小さな悪戯に成功して、少年は唇の端を持ち上げる。
何事もなかったようにベンチに腰かけて、少女の頭をそっと自分にもたせかけた。

近づいてくる足音にはっとして顔を上げると、一人の青年が立っていた。
手に水やり用ホースを持っている。
ホースの先からほとばしる水流に、小さな虹がかかっていた。

困ったように微笑んで、青年はゆっくりと後ずさる。
指に絡めた少女の髪は、ほのかに陽の香りがした。

「さっきのこと、マコには秘密にしてね」
「何のことでしょう？」
エプロン姿の青年はそ知らぬ顔でとぼけてみせた。

キッチンを満たすバニラの香り。
テーブルの上には天然ハーブを刻み込んだ焼き立てのスコーン。
生クリームを泡立てる手際は鮮やかで、まるで洋菓子店の厨房にいるようだ。

「心配しなくても言いませんよ。私も秘密にして頂いていることですし」
「知ってたの？」
「ええ、まあ」
「好きなの？　好きでやってることなの？」

直己は曖昧に微笑んだ。
露骨な視線を向けられて、青年は居心地悪そうに目を逸らした。

指先でスコーンを口の中に放り込み、遥は相手を観察した。
橘直己が母親の愛人だと知ったのは、つい最近のことだ。

藤原麗華、本名、一条麗華は、日本を代表する女優であり、恋多き女としても知られている。
三十六歳とは思えぬ見事なプロポーションと脚線美。
華やかな衣装をまとってスクリーンに登場すれば、二十代の若手女優などくすんでしまう。

ある時、自宅に戻ったら、カーポートに真っ赤なポルシェが停まっていた。
写真誌にしばしばスクープされた母親は、いつも違う男性を連れている。
遥が知っているだけでも、役者、映画監督、スポーツ選手と、その顔ぶれは華やかだ。
でも、母親が自宅に恋人を連れてきたことは一度もなくて……。
だからこそ、ドアの隙間から垣間見えた光景は、白昼夢のようだった。

## 17．秘密2

誰もいないリビングで、母親と青年が激しく求めあう姿を見たのは、あれが最初で最後だった。
でも、今でも二人は、子供たちがいない時間を狙って、密会を重ねているに違いない。

「母親が誰とセックスしようと、僕は全然構わない。でも、何だか釈然としないんだ」

視線を逸らせば、窓から見える百日紅の鮮やかさが目に飛び込んできた。
青年がここに来てから、優しい色の花が増えた。
プロの庭師に頼まなくても、この家の庭には花が途切れることがない。

温かな料理の香り。
きちんと整理整頓され、チリ一つ落ちていない家の中。
どんなに夜遅く帰宅しても、不機嫌な顔一つ見せずに迎え入れてくれる目の前の青年は、自由奔放に生きる母親がくれなかったものを、いつだって惜しみなく与えてくれる。

「愛人の手当てと、住み込みのハウスキーパーとしての給料をあわせると、いくらになるの？」
「愛人契約を結んでいるわけではありませんから……」

椅子に座り込んだまま、いつまでも動こうとしない遥のために、青年は紅茶をいれ始めた。
絶妙の濃さにいれられたフォションのダージリン。

ブルーベリージャムとたっぷりの生クリームを添えた焼きたてのスコーン。
それらを遥の前のテーブルに並べた後、ようやくすることがなくなったのか、デニムのエプロンをつけたまま、窓の外に目をやった。

「マコなら当分帰ってこないよ。夏休みだっていうのに、生徒会の打ち合わせ。戻ってくるのは夕方だって」
「そうですか」
欲しい情報を得た青年は、自分も椅子に腰掛けた。

柔らかな日差しの差し込む広々としたキッチン。
バニラと紅茶の香り。
窓の外で揺れる花々。
爽やかな夏の昼下がり。

「ああいう関係に持ち込んだのは私の方です。どんな手を使っても、藤原……いえ、一条麗華という人について知りたかったものですから」
「母さんを誘惑したってこと？」

華やかな世界に生きる母親が、十二歳も年下の平凡な青年を、たとえ遊びだとしても、はたして相手にするだろうか。
白い半袖のポロシャツにジーンズ姿の青年は、男と女のどろどろしたものとは、全く別次元の人間に見える。

だが、無個性であることが個性のような顔は、よく見れば上品に整っている。
そのことに気づいた時の衝撃が蘇る。
雰囲気が全く違うから、不思議と気がつかなかったけど、髪をセットし、タキシードを着せて、グランドピアノの前に立たせたら、写

真におさまっているあの青年と見分けがつかないかも知れない。

「あなたは誰？　母さんの何を知りたいの？」

柄にもなく真剣な声が出た。

思わず立ち上がった遥の前に、新しくいれなおした紅茶を置きながら、青年は穏やかに微笑んだ。

## 18．秘密3

会いたいとケータイで告げた時、母親が指定した場所は、某高級レストランだった。
恭しく通された奥の一室。
アールヌーボー様式のクラシカルな店内は、世間一般の高校生であれば、足を踏み入れることに躊躇するに違いない。

真っ白いテーブルクロス。
窓に配されたステンドグラス。
エミール・ガレのテーブルランプが投げかける光が、何の注文もしないのに出てきたブラッドオレンジジュースの色と交じり合って現出させる幻想的な赤。

十五分ほど経った頃、その色よりも更に浮世離れした空気をまとい、女優「藤原麗華」が登場した。
息子と会うのに大胆に胸の開いたドレスを着る心理はよくわからない。
少し目のやり場には困るけど、アールヌーボーの内装には見事に調和していて、ひょっとすると、壁に飾られたミュシャの絵の美女よりきれいかも知れない。

「真琴は一緒じゃないのね」
「うん。マコはいいんだ。それよりさ……」

給仕が下がったのを横目で確認し、遥は軽く身をのりだした。

「直己さん、出て行くってさ」
そっと耳元で囁くと、艶やかな微笑が一瞬で剥がれ落ちた。

「母さんを一緒に連れて行くつもりだったそうだけど、やめたんだって。ひょっとして、駆け落ちでもするつもりだったの？」

わざと軽い調子で告げると、怖い目で睨まれた。
母親がどうして、そんなに必死なのか、遥にはさっぱりわからなかった。

ワインボトルを恭しく捧げて来たソムリエに二言三言告げてから、麗華は店の外に飛び出した。
息子の腕を強引につかみ、地下の駐車場に止めていた、真紅のフェラーリに身を滑らせた。
耳に押し当てたケータイを握る手が震えている。
いくら待っても、相手が応える気配はなさそうだ。

「そんなに直己さんが大切？　あの人が母さんを愛しているとは思えないけど」
「愛されていないことは、わかっていたわ。でも、そんなことはどうでもいいの！」

麗子はずっと罪の意識にさいなまれていた。
裕福な家に生まれた苦労知らずの自分と違い、子供の頃に両親を亡くし、ずっと施設で育てられた青年は、血のにじむような努力と引き換えに、輝く未来を手に入れたはずだった。

十八年の時を経て現れた木島武彦にそっくりな青年。
穏やかな微笑とともに差し出された手を、麗華は一片のためらいもなく掴んでいた。

「今度は誰にも渡さない。たとえ相手が死神でも……」

鬼気迫る横顔に、思わず目を奪われた。
実の親子であるにも関わらず、遥は母親のことも父親のこともあまり知らない。
聞く機会がなかったと言えばそれまでだが、我が子を顧みることもなく、華麗な恋愛遍歴を重ねる母親の過去など、知りたくもなかったというのが真相だ。

経済界を牛耳る実業家の娘で、大学一年の時、同じ大学の先輩だった木島武彦と恋に落ちた。
恋人の死後、大学を中退。
周囲の反対を振り切って、恋人の忘れ形見の双子を生み、その二年後に芸能界入り。
それ以後は、親とも親戚とも縁を切り、女優として第一線であり続けた。

全てマスコミの受け売りで、真実かどうかさえわからない。
橘直己は、麗華がどんな人間なのか、知りたかったのだと言っていた。
わざわざ本人に近づかなくても、麗華のプロフィールも、恋愛遍歴も、週刊誌のバックナンバーをめくれば、いくらでも載っている。

父親と似ているのは、単なる他人の空似だろうか？

ぼんやりと考えた時、妙な感じに車が揺れた。
逢魔が時の薄闇の中、カーブの向こうから突如あれわれたのは、大型トラックだった。

中央線を超えて、こちらに迫ってくる。
接触を避けようと、麗華が大きくハンドルを回したのはその時だ。

遠心力に引かれるまま、車はガードレールを飛び越えた。

# 19．ハレルヤ1

『汝、殺すなかれ』
『汝の敵を愛せ』
『愛する者よ、自ら復讐するな。ただ神の怒りに任せまつれ』

幼い頃、無条件に信じていた、神の言葉。
教会に響く敬虔な楽の音。
全てを失った今、闇に閉ざされた心で叫ぶでしょう。
ハレルヤと。

施設と同じ敷地にあった教会のことは、細かな部分まで今でもよく覚えている。
つややかな飴色の椅子。
赤、緑、黄のステンドグラスが、教会の床に小さな花を描き出す日曜日の朝のミサ。

ピアノに向かう彼と、その傍らに立つ彼女。
澄んだソプラノがピアノの音に寄り添うように流れ出すと、石で囲まれた小さな空間は、敬虔な気に満たされた。

それなのに。
二人が共にあることを、神は不快に思われたのだろうか。
あの悲劇は、神がくだされた罰なのか。

「真琴さん？」

庭の木に隠れるようにして、両手で顔をおおっている少女に気がついて、思わず声をかけてしまった。

もちろんすぐに後悔したが、この状況で逃げ出すわけにもいかない。
泣きぬれた瞳が、救いをもとめるように、じっとこちらを見つめている。
持っていた荷物を、さりげなく背後に隠しながら、直己は穏やかに微笑んだ。

「ずいぶんと早いお帰りですが、学校で何かあったのですか？」

少女を促しベンチに座らせてやってから、そっとハンカチを差し出したが、少女はそれを受け取ることをせず、花の首がぽきりと折れるようにうな垂れた。
制服のスカートを握り締めた手に、ぽとぽとと涙が落ちる。
直己は手にしたハンカチを、少女の頬に押し当てた。

「何があったんです？」
地面に膝をついてもう一度訊ねると、じっと身を硬くしたまま、少女は顔を持ち上げた。

「雅美が……私のこと、ひどいって、好きでもないくせに、ヒー君の心をもてあそぶようなことをしてるって……」
「雅美って？」
「私の親友でヒー君と同じ剣道部の女の子」

ヒー君――美山聖。
近所に住む、名家の一人息子。
雅美という子は、聖のことが好きなのだろう。
だとすれば、文句の一つも言いたくなる気持ちは、よくわかる。

「真琴さんは、どうして聖さんと付き合うことにしたのですか？」
「どうしてって言われても……」

「彼のことが好きですか？　一緒にいたいとか？　触れたいと思う？　キスしたい？　そして、その先のことも……」

「ま、ま、待って！」

真っ赤になって、手をばたばたさせる少女は子供にしか見えない。

ふふっと笑って、直己は質問を打ち切った。

## 20．ハレルヤ2

「わからないのなら、試してみることです。相手に触れて、何も感じなければ、幼馴染のままでいた方がいい」
「触れるって、どんなふうに？」

大真面目にで訊ねられ、直己は軽く肩を竦めた。
純粋培養の姫君は、言うことがいちいちおもしろい。
おもしろいけど、聞いているこっちは、恥ずかしくなっている。

「そうですね、とりあえず、手をつないでみるとか」
「こんな感じ？」

理科の実験でもするような顔をして、手のひらを重ねられ、直己は思わず苦笑する。

「私を実験台にされても……」
「何か感じる？」
「そういう真琴さんはどうなんです？」

難しい顔をして、真琴は首を傾げている。
重ねるだけでは足りないと思ったのか、今度は指を絡めてきた。

「……わからないわ……」
「じゃあ、この方法はだめですね」

あっさりと告げられて、真琴は不満そうだった。
そのせいか、いつまでたっても、手を放そうとはしなかった。

動かぬ二人を包んでいた夕映えが、次第に色をかえていく。

美しく花開いていく少女を見ているのは楽しかった。
たとえそれが、触れてはならぬ花だとしても、一日でも長くそばで見ていたかった。

地道な努力家で、飾らない所がいい。
しっかりして見えるのに、実際はかなり抜けていて、浮世離れしたところが愛らしい。
ピンとはずれの劣等感だって、見方によっては美徳かも知れない。

真っ直ぐな瞳で見つめられて、どきりとすることがある。
あどけない笑みを向けられて、抱きしめたくなることも。

その髪の一筋まで愛している。
だから、もう、消えてしまおう。

## 21．ハレルヤ3

長く続く病院の廊下。
白い壁に定間隔に穿たれた四角い窓から、朝の光が差し込み始めた。
外を見ていた少年は、疲れた表情で目を伏せて、どこか苦しげに吐息をついた。

ガードレールを超えて転落した真紅のフェラーリは、崖の途中で一回転して5m下の草むらで停止した。
運転手は意識不明のまま病院に運び込まれ、廊下の突き当たりにある手術室の扉の向こうに消えたまま、一向に姿を現す気配がない。

助手席に座っていた少年は、車がガードレールを乗り越える直前に脱出したために、骨折した左腕を吊っていることを除けば、二本の足で問題なく廊下に立っている。

「運び込まれた先が、ヒー君とこの病院だなんてさ」

不満げに呟いた遥は、こんな時でも双子の姉のことを気にかけているに違いない。
真っ青な顔でさっきまでここにいた少女は、倒れる直前に幼馴染の少年に抱きかかえられ、ここではないどこかへ連れ去られてしまった。

一番近くにいたのに、動かぬ左腕のせいで、遥は真琴を支えることができなかった。

ここにいる間中、震える少女の指先は、弟が羽織ったシャツの裾をつかんでいた。

声を掛けることもなく、二人は互いに触れることもなく、それでいて、寒風に耐えるひな鳥のように寄り添って、無言で時を刻んでいたのだ。

「あなたが出て行くと言った途端、母さん、パニクっちゃってさ」

真琴がいる間、決して口にしなかった事故のいきさつを、遥はよどみなく語り終え、少し離れたところにたっている青年につかつかと歩み寄った。

「自分のせいで、女が一人死にかかっているのってどんな感じ？すごく愛されているんだね。平然としているところを見ると、あなたは母さんのこと、何とも思ってなかったみたいだけど？」

麗華は子供たちの前でさえ、華やかな女優の仮面を外したことがない。

母親に甘えたことも、母親に叱られたこともない。

それでも親子である限り、橘直己と母親の関係について、無関心のままでいることは許されない。

「あの方が愛しているのは私ではありません」

青年が口にしたのは、それだけだった。

淡々とした言葉には、いかなる感情も込められていなかった。

## 22．ラビリンス1

時間つぶしに読んでいた本から顔を上げると、稽古着を颯爽と風になびかせながら、木下雅美が立っていた。

「何か用？」

そっけない言葉に、少女の頬に朱がのぼる。
それでもひるむことなく、聖をまっすぐ見つめ返してきた。

「インターハイで二度も個人優勝した人が、部活をさぼって何をしているの？」

ストレートに告げられて、今度は聖が面食らう番だった。
顧問も、部長も、先輩も決して言わないことを、同じ剣道部とは言え、女子部の人間に言われたのだ。

「木下には関係ない」

ばつの悪さも手伝って、必要以上に冷たい声が出た。
言ってから、しまったと思ったが、いったん口をついて出た言葉は戻らない。

視線を逸らせて相手が去るのを待ったけど、雅美はじっと佇んだままだった。
いつまでも知らない顔をしているわけにもいかず、聖は本を閉じて立ち上がった。

「真琴のことが心配なんだ。遥は外泊続きでつかまらないし、真琴

は病院と家の往復でまいってる。木下だって知ってるだろ？　誰かがそばにいてやらないと……」

沈痛な面持ちで本音を告げられて、雅美は無言でうな垂れた。

もちろん知っている。

手術の末、一条麗華は辛うじて命をとりとめたが、依然として意識は戻らない。

今さら説明されるまでもなく、一条家は大変な状況なのだ。

「真琴、今日は遅くなるよ。担任の先生に呼ばれてたから」

「うん、知ってる」

「病院にも行くの？」

「うん、ウチの病院だし……」

「好きなんだ？」

「え？」

「真琴がそんなに好きなんだ！？」

百七十センチの長身にスレンダーな身体つき。

男子生徒よりも女子生徒に人気のあるスポーツ少女が、何よりも大切な部活を抜け出した理由に、ようやく聖も気がついた。

目を見れば、おのずと思いはあふれ出す。

それは自分も同じはずだ。

一方通行の辛さだって、誰よりも自分が知っている。

「好きだよ」

弟に向ける複雑な眼差しも含めて全部。

「だから、ごめん。でも、試合には絶対勝つから」

きっぱりと告げると、浮かんだ涙を稽古着でぬぐい、雅美は笑顔で頷いた。

去っていく後姿を、聖は無意識に目で追っていた。

女の子をふったのは、初めてじゃない。

涙ぐむ子もいれば、両手で顔を覆って泣き崩れる子もいたが、涙を見せられたぐらいで、いちいち心が揺れるはずもない。

でも、一瞬だけ見えた木下雅美の涙は、はっとするほどきれいだった。

## 23．ラビリンス2

「真琴からの電話もメールも着信拒否だなんて、お前一体、何を考えてるんだ！」
大声でどなられて、遥はケータイを耳から引き離した。
聖が怒るのも無理はなかった。
家にも病院にも報道陣が詰めかけて、一条麗華の病状をつきとめようと、大騒ぎしているという。
真琴は家に帰れなくなり、聖の家に居候しているらしい。

「いいんじゃない？」
苦し紛れに遥は無理やり明るい声を出した。

「ヒー君の家って、そこらの高級旅館より立派だし、部屋だって余ってるし、おじいさんも、おじさんも、おばさんも、ついでにヒー君だって、マコのこと大好きでしょ？」

ケータイの向こう側で、聖は大げさにため息をついたけど、家族ぐるみで真琴のことが好きと言われたことを、否定するつもりはなさそうだ。

「あのなあ、それとこれとは話が違うだろ？　真琴は捜索願を出すなんて言ってるぞ。もちろん俺は止めたけど……ハル、お前さ……」
どこにいるのかと訊ねられ、女の子のマンションだと答えると、ケータはたちまち沈黙した。
困惑しているのが、手に取るようにわかる。
眼鏡のブリッジを押し上げながら、言うべき言葉を捜しているのか

も知れない。

「とにかく着信拒否はやめろ。でなければ、真琴に俺のケータイからかけさせるからな。学校にも行けよ。今のままでは出席日数が足りなくなる。あ、それから、腕の方はどうなんだ？　ひびが入っていただけと言っても、完全に治るまでは……」

遥は一方的に電話を切った。

聖の面倒見の良さはウルトラ級だ。

おまけに、そこらの大人より、甲斐性がある。

憂鬱な思いを振り払い、遥はノートパソコンの画面に向き直った。

右手だけでキーボードを扱うのは、想像以上に時間がかかる。

幸いなことに、カフェは比較的空いていた。

長時間居座ることについては、何の問題もなさそうだ。

いくつもの視線が絡み付いてくる。

振り返って微笑みかければ、今夜の宿があっさりと決まるはずだった。

目が合っただけで、言葉を交わしただけで、人はたやすく好意を寄せてくる。

でも、本当に欲しいものだけが、手に入らない。

ＰＣのディスプレイには古びた教会が映っていた。

これがハウスキーパーの派遣会社が保管していた直己の住民票の写しに記載されていた本籍地だ。

身寄りのない子供を預かる児童養護施設として機能していた時期も

ある。

でも、過疎化が進み、預けられる子供も祈りをささげる人もいなくなり、今では存在価値を失っている。

## ２４．ラビリンス３

直己の個人情報を入手することは、遥にとって、それほど難しいことではなかった。
受付の若い女性ににっこりと微笑みかけて、企業の責任者に取り次いでもらい、同社が派遣してきたハウスキーパーが藤原麗華の私物を盗んで失踪したという作り話を、言いにくそうに打ち明けただけだ。

「事を荒立てたくはないんです。ただ、橘さんがどんな人なのかを知っておきたくて」
遥のそのひとことで、相手はあるだけの情報を差し出した。

履歴書の学歴には、教会の所在地から遠く離れた私立高校の名称が書き込まれていた。
一年の秋に中退したまま、その先は空欄になっている。

高校を訪れた遥は、「進路指導室」の札がかかった一室に通された。
初老の教師は意外にも、在学期間が一年にも満たない直己のことをよく覚えていた。
苗字は違っていたが、写真を見せるとすぐにわかったようだった。

ずば抜けて成績が良かったという。
入学試験の結果はほぼ満点に近く、学校創立以来の秀才と言われていた。

「その優秀さゆえに、資産家の家に跡取りとして迎え入れられたのだと聞いた。本当に器用な子でね。何をやらせても上手かった。でも、誰も周囲に寄せ付けず、いつも暗い目をしていたよ。彼が養子

に来た途端、長年子供に恵まれなかったその家に男の子が生まれてね。きっと居場所がなかったんだな。そのうち学校にも来なくなり、養父母に問い合わせてみたんだけど、素行が悪いので縁を切ったなんて言うんだ。辛い思いをしていることには気づいていたのに、私は見てみぬふりをしてしまった」

懺悔の呟きとともに、重いため息を漏らした教師は、テーブルの上に置かれた写真に目を落とした。

「この写真の中では優しい目をしているね。私は彼がこんな風に笑うのを見たことがない」

遥の知っている橘直己は、穏やかな目をした青年だった。

暗い表情など一度として見せたことがない。

遥は立ち上がり、品行方正を絵に描いたような所作で一礼した。

「生き別れになったお兄さんが見つかることを祈っているよ」

「ありがとうございます」

「それはそうと、君の顔、どこかで見たと思ったけど、娘が買ってくる雑誌の表紙にたびたび載っているモデルの少年にそっくりだな」

まさか本物ではないだろうねと言われて、遥は笑って否定した。

公園のベンチに座ったついでに、ケータイの履歴をチェックしてみると、聖からうんざりするほど着信が入っていた。

「自分まで着信を拒否されたら、ヒー君は激怒するだろうな」

着信拒否のボタンを押そうとして思いとどまった時、明かりのがともったケータイの画面に水の雫がぽとりと落ちた。

（さっきまで青空だったのに）

空には厚い雲が垂れ込めていた。

直己の養父母を訪ねるまで、天気が持ってくれればいいが。

母親が入院して、わかったことがいくつかある。
大女優の看板を掲げていながら、母親名義の銀行残高は拍子抜けするほど少なかった。
映画、テレビドラマ、そしてＣＭ出演のギャラは、一体どこに消えたのか。

（橘直己に貢いでいた？）
浮かんだ思いを、遥はすぐに否定した。

母親が入院している特別室のテーブル上に、真紅の薔薇の花束と一緒に、白い封筒が置かれていた。
封筒の中には、駅のロッカーの鍵が入っていて、ロッカーの中には小さなカバンが収まっていて、カバンの中には橘直己の預金通帳と印鑑が入っていた。

通帳の残高は１４００万円と少し。
大女優に貢がれていたとすれば少ないし、住み込みのハウスキーパーとして働く２４歳の男の貯金としては多すぎる額だ。

## 25．死神1

（テレビなんか、つけるんじゃなかった）

いきなり始まった車のコマーシャル。
澄んだ秋空を背景に、母娘が寄り添うようにして立っている。
笑顔で手を振っている。
二人の視線の先で、同じように笑顔で手を振る父親の姿。

柔らかな光。
暖かな空気。
女神のような容姿を持つあの人は、家庭を顧みたことなどないくせに、絵空事の幸せを、いつだって完璧に演じてみせた。

つけたテレビをまたすぐに消した後、真琴はソファーで膝を抱えた。
あの事故から一ヶ月。
麗華の病状は、他の入院患者の口から外部に漏れ、一時は騒然としたものの、その後の病状に変化がないこともあり、家の周辺で報道関係者の姿を見ることもなくなった。

マスコミは貪欲で飽きっぽい。
彼らをそうさせているのは、テレビの前に座っている視聴者だ。
手垢のついた情報には価値がない。
よりフレッシュで、よりセンセーショナルな事件を追い求め、移ろっていく。

聖が予備校に行っている時を見計らい、真琴は自宅に戻ってきた。
遥の姿も直己の姿もどこにもない。
何度も捜索願を出そうとしたが、そのたびに聖に止められていた。

中間テストの結果はさんざんだった。
でも、そんなことはどうでもいい。

今回のテストで校内にセンセーショナルを巻き起こしたのは弟の遥だった。
ずっと学校を休んでいたハルが、試験日にふらりと現れた。
試験の結果は五科目全て満点で、聖は二位に甘んじる結果となった。
カンニングだと騒ぐ者もいたが、真琴には、そうではないことがわかっていた。

遥とって、高校のテストで満点を取ることなど、簡単なことだ。
試験勉強などしなくても、ただ、その気になりさえすればいい。
つまりはピアノと同じなのだ。
成績に執着する双子の姉に遠慮して、ずっと手を抜いていたに過ぎない。

（泣くようなことじゃない）
真琴はこぼれそうになる涙を無理やり抑えこんだ。

本当はずっとわかっていた。
真琴が遥に与えられるものは何もない。
遥は天才で、できの悪い姉に妙な気を使ったりしなければ、どこまでも高みにのぼれるのだ。

（お姉ちゃん離れしたんなら、喜ばしいことじゃない）
心の中で強く自分に言い聞かせた時、カチャリという音がした。

それは、誰かがキッチンのドアを開けた音だった。
ちらりと流し見た掛け時計の文字盤は、午後九時半を指していた。

直己なら、表のインターフォンを鳴らすだろう。
遥なら、キッチンではなく、離れの部屋から入ってくる。
いやな予感がして、咄嗟に窓に駆け寄った時、背後のドアが音もなく開いた。

「一条真琴さんですね？」

ぎこちなく振り返ると、黒っぽいスーツを着た男が立っていた。
年は四十代半ばだろうか。
口調は丁寧だけど、他人の家に土足で上がりこんでくるぐらいだから、まともな人間であるはずがない。

「橘直己がどこにいるか、ご存知ありませんか？」
余裕のある笑顔で男が取り出した拳銃に、真琴は慄然と凍りついた。

「拳銃を見るのは初めてですよね。これは、S&WM36。威力はたいしたことありませんが、持ち歩くには便利だし、至近距離からなら……」
「直己さんがどこにいるのかなんて知らないわ！　黙っていなくなったんだから！」
震えながらも、必死に睨みつけてくる少女を面白そうに見つめたまま、男は静かに含み笑った。

「知らないというのなら一緒に来ていただきましょう。噂通りの美少女だ。あなたの協力があれば、簡単におびき出せそうだ」

何が何だかわからない。
恐怖をやりすごそうと、真琴は震えるこぶしを握り締めた。
橘直己は確かにこの家で働いていた。

だからといって、真琴を使って直己をおびきだそうなんてナンセンスだ。

「赤の他人なんだもの！　私を痛めつけたって来ないわよ！」

「さあ、それは、どうかな？」

伸びてきた腕を振り払った時、離れの方角からかすかなピアノの音が聞こえてきた。

ありえない展開に、真琴の意識が遠のきそうになる。

とぎれとぎれに耳に届く旋律は、モーツァルトの「きらきら星」だった。

## 26．死神2

「ピアノを弾いているのは誰です？」
「……」
「誰なのかと聞いている」
「お……弟……です」

言っても言わなくても、多分結果は同じだけど、言った後で後悔した。
どうしてこんな時に限って戻ってくるのだろう。
しかも、その存在を主張するように、ピアノを弾き始めるなんて。
背中に突きつけられた銃口に押されながら、一歩、一歩、踏み出す足が震えている。
「離れ」に近づくにつれて、少しずつ鮮明になるピアノの旋律。

（あ、この音……？）

はっと顔を上げた途端、怪訝そうな瞳を向けられて、真琴は急いで目を伏せた。
さらに激しくなる胸の鼓動と手の震え。
これは、この演奏は……。

（ハルじゃない）

廊下の突き当たりの重い扉は閉まっていた。
居間までピアノの音が届いたのは、庭に面した窓が開いているからに違いない。

男がノブに手をかけると、測ったようなタイミングでピアノの音が掻き消えた。
開けろと目で合図され、真琴は震える手を伸ばした。

少し開いたドアの隙間から、照明の光が差し込んできた。
その明るさに力を得て、一気にドアを押し開けると、煌々と明かりのともる部屋の真ん中で、黒光りのするグランドピアノが、その存在を誇示していた。

演奏者は一体どこへ行ったのか。
背中を押されて部屋に足を踏み入れた時、耳元で風を切る音がした

「ウッ」という男の呻き声。
崩れるように床にかがみ込んだ男の目の前で、蹴り上げられた拳銃が弧を描く。

「こちらから連絡を差し上げるつもりでしたのに」
俯いた少女の背中がびくりと震えた。
落ち着いた声音も、空中でキャッチした銃を鮮やかな手つきで構えなおした後姿も、まぎれもない橘直己のものだった。

「アメリカから、いつ帰国なさったのですか？」
立ち話でもするような気さくさで直己は男に語りかけた。

男は苦痛に顔を歪めたまま答えない。
こわばった右腕には、深々とバタフライナイフが刺さっていた。

「車で待期していた方々にはお引取りいただきました。置いてけぼりをくらった気分はいかがです？　十代の少女に銃を突きつけて脅したからには、それなりの覚悟ができているんでしょ？」

「な、何を言っている?！行き場のないお前を拾ってやったのは！」

「感謝していますとも。あなた方には色々と教えていただきました。色々とね」

真琴は呆然と青年の背中を仰ぎ見た。

見るからに危険な男が、どこにでもいそうな青年に銃を奪われ、腕を傷つけられ、追い詰められた子猫のように小さくなっている。

ジーンズに包まれた長い足がすっと前に踏み出した。

後ずさりした男の背は、すぐに扉に追い詰められ、油汗のにじむ眉間に黒光りのする銃口が突きつけられた。

## 27．死神3

「直己さん、やめて！」
真琴は震える声で懇願した。
けれども目の前の背中は身じろぎもしない。

この三年間、一体何を見ていたのだろう？
こざっぱりとした服装。
短すぎず、長すぎることもない髪。

長身痩躯で整った顔をしているけど、街ですれ違った十人中十人が、彼についての印象を何一つ語ることができない、平凡であることが唯一の個性のような青年は、家事が得意で、何でも器用にこなし、穏やかで、優しくて、真琴のくだらないグチや泣き言に、いつも耳を傾けてくれた。

「お前、わかっているのか？　こんなことをして、どうなるか」
「わかっていますよ、もちろん」
「その娘がどうなってもいいのか！？」
鮮血に濡れた男の指が、震えながら真琴を指差した。
その足元には早くも血だまりができている。

「この状況で脅しですか」
青年は男の眉間に銃をつきつけたまま、真琴の方を顧みた。

「真琴さん、美山さんの所に行っていてください。聖さんに頼んで警察に連絡を……」
自分がこの場を動けば、直己は引き金を引くかも知れない。
裏口の扉からすぐに外に出られるのに、少女は凍りついたように固

まったまま、首を横に振っただけだった。
しばらく無言で見つめあった後、青年はあきらめたように息を吐き出した。

「橘、何を考えているんだ？　お前が連絡を絶ったまま戻ってこないから……我々は……」
「人質をとっておびき出そうと考えたわけですか？　くだらないですね」
「くだらないものか。現にお前はここにいる。我々は知っているんだぞ。その子はお前のアキレス腱だ。お前があくまでも我々に抵抗するつもりなら……」
「抵抗するつもりなら？」

青年の声はあくまでも穏やかだったが、全身からゆらりと立ち上った殺意に、真琴ははっと息を飲んだ。
考えるより早く、身体の方が動いていた。
ぶつかるように抱きしめた背中は、まぎれもなく橘直己のものだった。

「直己さん、お願い！」
「やめての次は、お願いですか？」

涙声で訴えると、青年が苦笑する気配がした。
次の瞬間、鳩尾を蹴られた男は、あっけなく昏倒して床にくずれた。

一体、何が起こったのか。
真琴はへなへなとその場にへたり込んだ。

## 28．死神4

「今からでも、美山さんのお宅へ行っていただくわけにはいきませんか？」
「この人は誰？」
「もともとは大物代議士の息子だそうですが、今は裏社会の人間で……。いや、そんなことより……」
「直己さんも裏社会の人間なの？」
まっすぐな目を向けられて、直己は視線を泳がせた。
「今さら否定はできませんね。私はもともとこの男たちの一味です。何食わぬ顔で一条家に入り込み、麗華さん、つまりは、あなた方のお母様を監視していました」
「何のために？」
「真琴さん、お願いですから」
「何のために？」
「……」
聞こえないふりをしても無駄だった。
真剣な表情で詰め寄られたのでは、降参する他はない。
「麗華さんは弱みを握られていたのですよ。稼ぎのほとんどをヤクザに吸い取られて……」
淡々と語りながらも、家事をこなすのと同じ手際の良さで、直己は男を縛り上げ、ポケットから携帯電話を取り出した。
「どこに、かけるの？」
青年は床で気絶している男をちらりと見て、再び少女に視線を移し

た。

「警察です」

「捕まるわ」

「この男が捕まると、まずいことでも？」

「何、のんきなことを言ってるの？　捕まるとまずいのは直己さんでしょ！」

少女の指がすばやく動いて、青年の携帯電話を奪い取った。

きょとんとしたまま、少女を見つめていた青年は、呆れたように吐息をついた。

「今までの話、全然聞いていなかったんですか？　いいですか？

私は裏社会の人間で……」

「聞いていたわ！　聞いていたけど！」

少女の切れ長の目が怒っている。

怒りながら泣きそうになっている。

「とにかく、ケータイを返してください」

開いての瞳から涙がこぼれる寸前で、直己はあわてて顔を逸らした。

あさっての方を向きながら、ためらいがちに伸ばした手を、いきなりつかまれ引っ張られた。

「逃げましょう！」

「え？」

「早く！」

「ど、どうして真琴さんが逃げるんです！」

引っ張られた手を、無理やり引っ張り戻したが、少女は逃げるの一

点張りだ。

「まさかとは思いますが、私を誰かと同一視しているのでは？」

「誰かって誰？」

「その……ピアノの上の……」

指差された写真たての中でタキシード姿の青年が笑っている。

直己はそれをチラリと見ただけで、すぐに直己に向き直った。

「直己さんがお父様と似ていることには気づいていたわ。でも、他人の空似でしょ？」

「そうです。他人の空似です。だから一緒に逃げる理由もない。私のことは忘れてください。あなたにはステキなナイトが二人もいるのですから、二人のどちらかを選べばいい」

「ハルは弟で……」

「それでも私よりは何倍もましだ。いいですか？　あなたは品行方正な優等生なんですよ？　危険なことに首をつっこんではいけません。それとも、私を愛しているとでも？」

こんなことを言うつもりはなかったのに。

直己は恥じ入るように目を伏せた。

即座に否定すると思ったのに、少女はそれをしなかった。

「私、直己さんを愛しているのかしら？」

「いや、違う。そうじゃない。そんなことは絶対に……」

「ね、もう一回だけ、試してみてもいい？」

開いての返事を待たずに、目の前のシャツの胸倉をつかんで引っ張った。

青年の上半身が傾いで、互いの唇がかすかに触れた。

その刹那、急に視界が暗くなり、暖かい体温に包まれた。
押し付けられた唇の感触に鼓動が早くなる。
重なったままの唇が軽く押し開けられ、細く開いた間から、やわらかく湿ったものが入り込んできた。

身体がしびれて、胸がどきどきして、頭がくらくらして、息ができない。
ようやく離れた唇が、今度は真琴の耳元に移動した。

「さようなら」

そっと耳たぶを甘噛みして、吐息とともに吹き込まれた言葉に、真琴はぱちりと目を開いた。
言葉を発する暇もなく、鳩尾に強い衝撃が落ちてきて、あの男と同じことをされたのだと、気づいた時は手遅れだった。

「もう会うことはありませんが、あなたの幸せを祈っています」

紗がかかったように掠れていく意識の中、直己の声が耳朶を打つ。
言葉の意味をたぐりよせることができぬまま、真琴は意識を手放してしまった。

## 29．天辺1

着信拒否はいつのまにか解除されていた。
つながらないはずのケータイは、耳慣れない呼び出し音の後、嘘のようにあっけなくつながった。

「ハル」
名前を呼んだだけなのに、弟が小さく息を飲む。

「泣いてるの？　マコ、ねえ、どうしたの？」
真琴はケータイを耳に押し付けた。
声が震えていたわけでもなければ、かすれていたわけでもない。
それなのに、どんなささいな異変も、弟にはすぐに見抜かれてしまう。

「私は大丈夫。でも、直己さんが……」
「戻ってきたの！？　何かされたの？　真琴、あの人は……」
「ハル、待って！　お願いだから、先に私の話を聞いてくれる？」

見知らぬ男が家の中に入ってきたこと。
拳銃を突きつけられたこと。
ピアノの音が聞こえてきて、遥かと思ったらそうじゃなかったこと。

「部屋に足を踏み入れた途端、その人が床にしゃがみこんだの。腕にナイフが刺さっていて、目の前に直己さんが立っていた……」

遥は辛抱強く沈黙を守っている。
電話の向こうでどんな顔をしているのか、真琴は考えないことにした。

目を覚ました時、真琴はリビングのソファーに寝かされていた。
ピアノ室には、直己の姿も男の姿もなく、床に広がっていた鮮血も跡形もなく消えていた。

そのまま茫然としていると、聖が様子を見にやってきた。
聖には何も話さなかった。
もしも話してしまったら、聖は真琴を美山家から出さなくなるだろう。

「直己さんを探したいの。私は銃を突きつけられていたんだから、今回のことは正当防衛で……」
「そんなの逃げた時点でアウトだよ。マコ、もうあの人には関わっちゃだめだ。できだけ早く戻るから、しばらくの間、ヒー君のところに……」

誰も彼もが聖の名を口にする。
まるでやっかいものを押し付けるかのように。

「ハルはどこにるの？」
冷静な口調で訊ねると、ハルカは急におとなしくなり、言いにくそうに「アメリカ」と答えた。

「アメリカ！？　アメリカのどこ？」
「ニューヨーク」

思ってもみなかった。
学校はしょっちゅうさぼってたし、バイトで家を空けることも多かったけど、母親が意識不明で大変な状況の中、黙って海外へ行くことなど、今までの遥からは考えられない。

無意識にケータイを耳に押し当てた時、「ハル君」と弟の名を呼ぶ声がした。
そのたった一言で、真琴には、その声の主がわかってしまった。
そういえば、一週間前に母親の病院にお見舞いに来てくれて以来、一度も姿を見ていない。

「ハル、どうして広夢がいるの」
「ヒロム？　誰？　そんなことよりさ……」

どうしてごまかすのだろう。
遥の考えていることが、わからない。

真琴の手からケータイが滑り落ち、床の上に転がった。

## ３０．天辺２

背後から絡み付いてきた細い腕。
少年は無造作にその腕を払いのけ、未練がましくケータイの画面を覗き込んだ。

「電話でしゃべってて聞こえなかったんだけど、今、何かいった？」
「ううん別に、ハル君って、呼んだだけ」

邪気のない言葉を返されて、遥はがくりと脱力した。
こちらからかけなおすことは簡単なことだったし、すぐにでも真琴の声を聞きたかった。
全てを話せば真琴は理解してくれるだろう。

でも……。
遥はいらいらと髪をかきあげた。
言えないことが多すぎる。

「どうしたの？」
砂糖菓子のような声。
フードから覗くカールした髪。
真下広夢は、遥の前に回り込み、少年の顔を覗き込んだ。

案の定、少年はこの上なく不機嫌で、少女の顔を見ようとはしなかった。
こっちへ来てから、いや、ニューヨーク市警にコネがあるという嘘がばれてから、少年の笑顔を見たことがない。

でも、そんなことはどうでもいい。

機嫌が良くても悪くても、一条遥が美しいことに変わりはないのだから。

リンカーンセンターの広場で噴水を見つめる少年の横顔を、いくつもの目が見つめている。
黒いパンツにブルーグレーのタートルネックのセーター。
その上から薄手の黒いコートをひっかけただけのシンプルな組み合わせが、着飾った誰よりもおしゃれに見える。

若い女、若くない女、ゲイ、そして、何かのスカウトと思しき連中が、次々と遥に声をかけてくる。
玉石混交の申出を全て断って、遥は動じることがない。

「マコの声が怒ってた。僕が外国で遊びほうけていると思っているんだ」
この世の終わりのような落ち込んだ口調に、広夢の眉が持ち上がる。
容姿にも才能にも恵まれた遥には、怖いものなどないように見えるのに、双子の姉だけは別格のようだ。

「そろそろお姉さん離れした方がいいんじゃない？」
何気なく告げた一言に、遥は傷ついた顔をした。

「君はどうして僕の行くところについてくるの？」
不快そうに告げられて、広夢は視線を泳がせた。

「だって、ハル君、外国は初めてだって……」
「初めてだけど？」
「だったら、色々、困るでしょう？　その、私、こっちに土地勘があるし……」

言ってから、いたたまれない思いで俯いた。
遥は土地勘のあるガイドなんか必要としていない。
最初はアイドルを追いかけるファンのような気持ちだった。
知人を見送りにいった空港で、一条遥の姿を見つけた時、身体が勝手に動いていた。
真琴の姿が遥の周囲にないという状況も、広夢の背中を押していた。
ニューヨークへ行くと聞かされて、その場でチケットを買ってしまったが、嘘をついたのは失敗だった。

遥は何かを調べているようだった。
ニューヨーク市警、ジュリアード音楽院、地元のマスコミ、病院など、電話をかけたり、メールを送ったりしながら、次々とアポを取り付けては、地図を片手に出かけて行く。
はたで見る限りでは、言葉に不自由しているようには見えない。

「何を調べてるの？」
予想したとおり、答えは返ってこなかった。

吹く風の冷たさに広夢が思わず身をすくめた時、エヴリフィッシャー・ホール、メトロポリタン・オペラ、ニューヨーク・シティー・オペラと、コの字型に並んだ壮麗な建築群に一斉に明かりが灯り始めた。

建物群には目もくれず、遥はすっくと立ち上がり、日本に帰ると言い出した。

「か、帰るって、いつ？」
「明日」
「じゃ、じゃあ、今夜は私が泊まっている部屋に……」

「君の部屋？」

真顔で聞き返されて、頬に血がのぼっていく。
ニューヨークについたその日、半ば強引に遥を自分の部屋に招きいれた。
遥に抱かれ、彼女にしてもらった気になっていた。

「そんな気分じゃないよ」
そっけなく告げられて泣きそうになった。

「真琴に言うから！」
「何を？」
「遥君に捨てられたって、真琴に言うから！」

遥の腕が伸びてきた。
「いいよ、言えば？」
天使のような微笑を浮かべている。
抱き寄せられて夢心地になった時、頭上から優しい声が降ってきた。

「でも、気をつけてね。僕はマコ以外の人間には、いくらでも冷たくなれるから」
あんまり優しい声だったから、言葉の意味を理解するのに時間がかかった。
夢から覚め、愕然と目を見張った広夢の頬に、キスが一つ落ちてきた。

## 31．真実は闇の中

ホテルの窓からライトアップされた自由の女神が見えた。
女神の輪郭が妙な感じにぼやけていて、自分が泣いていることに気がついた。

（泣いたって何も変わらない）

それでも涙はとまらない。
俯いた遥の指先から一枚の写真がはらりと落ちた。

写真には三人の人物が写っている。
背後には教会の礼拝堂と飴色のオルガン。

オルガンの椅子に腰掛けたまま、上半身をひねってこちらを見ている青年。
青年の傍らに立つ少女。
少女と手をつなぎ、空いている方の手でこちらを指差し、無邪気に笑っている幼い少年。

始めて見た時は、息がとまるほど驚いた。
興信所がメールで送ってきたのは、橘直己とその兄姉の写真のはずなのに、青年は遥の家のピアノの上に飾られた写真の中の男、つまりは遥の父親と同一人物だった。

さらに遥を驚かせたのは、青年に寄り添うようにして立っている少女の方だった。

長い髪、くっきりとした切れ長の目、すらりとした手足……。

一体、どういうからくりなのか。
少女は真琴にそっくりだった。

木島武彦　１９歳。
木島由布子　１７歳。
木島直己　５歳。

遥は写真を拾い上げ、写真の裏面に走り書きされた名前に目を落とした。
木島由布子という名前は、聞いたことがなかった。
木島武彦にしたって、家にある写真はタキシード姿の一枚きりで、こんな風にリラックスした姿は見たことがない。

国際的なコンクールで賞をとり、奨学金でジュリアード音楽院に留学することになった木島武彦は、ジョン・Ｆ・ケネディ空港に降り立った直後に姿を消し、その翌日、変わり果てた姿でハドソン川に浮いていた。

アメリカではセンセーショナルに報道されたらしいけど、日本では新聞の小さな囲み記事にしかならなかったのは、興信所の調書によれば、何らかの報道規制がかかったからしい。

犯人は結局捕まらず、武彦の子を身ごもった一条麗華は大学を中退。親とも家とも縁を切り、死んだ恋人の後を追うようにアメリカに渡り、双子を生んだとされている。

女優として脚光を浴び始めたのはその数年後。
大変な苦労があっただろう。
だが、遥たちが物心ついた時、母親はすでに遠い人だった。

眩いスポットライト。
華麗な恋愛遍歴。
モニター画面に映し出される嫣然とした微笑。
だから、遥は忘れていた。
自分に母親が、そして、父親がいることを。

遥は母親によく似ている。
真琴は父親似なんだと思い込んでいた。
木島武彦と真琴は確かに面差しが似ているけど、木島由布子の写真を見てしまった今、そんな事実はかすんでしまう。

武彦が殺された時、由布子は武彦のそばにいた。
強姦に襲われたのは由布子の方だった。

武彦は妹を救おうとして殺された。
兄が殺される一部始終を目の当たりにした妹は、数人の男たちにレイプされた時、すでに正気を失っていた。
正気を失ったまま病院に入院し、正気を失ったまま子供を生んだ。

こんなこと、真琴に言えるはずがない。
自分を産んだ母親が、自分を産んだ直後に病院の窓から身を投げたなんてことを知ったら、真琴はきっと壊れてしまう。

遥は涙を拭い、部屋の窓を全開した。
尾を引くテールランプ。
パトカーのサイレン音。
ニューヨークの街は東京と同じで眠らない。

「マコ、僕たちは姉弟じゃなかったよ」

冷たい風に髪をあおられながら、写真と調書を小さくちぎった。
空に向かって投げ上げると、白い紙ふぶきが雪のように闇を彩り四散した。

## 32．誰が誰を愛してる

明け方近くに聖から電話がかかってきた。
母が意識を取り戻したのだと聞かされて、遥は言うべき言葉を探したが、相槌ひとつ満足に打つことができなかった。

花に囲まれた病室で、固く目を閉じた麗華は眠り姫のようだった。
目覚めることが、彼女にとって良いことか、それとも悪いことなのか、今の遥にはわからない。

「ハル、黙ってないで何とか言えよ、真琴が言っていたけど、アメリカにいるって本当なのか？」

真琴の名前を持ち出され、遥は身を乗り出した。
自宅に入り込み、真琴に銃を突きつけた男は、麗華を脅していた裏組織の人間だ。

直己は組織から離反した。
ああいう世界がどうなっているのかは知らないけど、今はたぶん追われる身だ。

「マコは？　マコもそこにいる？」
「病院には一緒に来んだたけど……」
「来たけど、なに？」
「それがさ……」

聖は明らかに困惑している。
遥は舌打ちしたいような気持ちで先を促した。

「ハルのとこにいた男の人、ええっと、橘さん…だっけ？」
「病院に来たの！？」
「違うよ。そうじゃない。仕事は辞めたんだろ？　居場所だってわからないそうじゃないか」
思わず立ち上がった遥は、聖の言葉にほっと胸を撫で下ろした。
そうだ、居場所がわからない。
遥の予想が当たっていれば、あの人はもう二度と自分のたちの前に現れない。
「直己さんのことはもういいよ。それより真琴は……」
「だから、話は最後まで聞けよ。あの人、病気だったんだってさ。慢性骨髄性白血病。グリベックっていう薬を飲み続けないといけないんだって」
真琴はいなくなったのは、その話を聞いた直後だった。
買い物に行ってくると言ったきり、いくら待っても戻って来ない。
「ケータイにかけてもつながらないんだ。真琴の友達にも連絡した。話を聞いていてわかったんだけど、あの人、ただの住み込みのハウスキーパーじゃなかったんだな。ええっと、つまり、麗華さんの……」
「母さんの愛人だよ」
相手が言いよどんだので、代わりに答えを投げてやる。
真琴は直己に懐いていたから、母親との関係を知って、ショックを受けたに違いない。
だが、これでもう、直己を探し出そうなんて思わないはずだ。

（本当に、そうだろうか？）

ふいに浮かんだ疑問が、遥の思考を反転させた。
真琴は本当に何も知らなかったのか。
遥がそうだったように、母親とのことも気づいていて、気づかないふりをしていただけじゃあ、ないのだろうか。

あの潔癖な姉が、全てに気づいていながら、それでも彼を慕っていたのだとしたら？
遥はぞっとする思いで、ケータイを持つ手に力をこめた。

「ヒー君、真琴を愛してる？」
「は？」
「答えて！」
「どうして本人にも言っていないことを、お前に言わないといけないんだ」

聖は困惑していたが、それでもただならぬ気配を察したのか、肯定の言葉を口した。

「じゃあ、僕の言う通りにして！　どんなことがあっても、真琴を守ってくれるよね？」
「でも、ハル、お前は……」
「僕はいい。僕だってちゃんとわかってる。マコと僕は姉弟で、弟はどうがんばったって弟だ」

そうだ、わかっていた。
わかっていたけど、密かに願い続けていた。

一生二人で生きていけるぐらいのお金をためたなら、誰も自分たち

を知らない国へ行って、二人きりで生きていくことはできないだろうか。
真琴がいれば何もいらない。
真琴もそんな風に思ってはくれないだろうか。

願うだけなら許されるはずだ。
たとえ空しい願いであっても、心は自由なのだから。

## 33．レクイエム1

東北の無人駅。
握り締めた切符を塗りの剥げた木製の小箱にぽとりと落とし、改札を抜けた。

駅前からタクシーに乗るつもりだったけど、タクシーどころか人影もない。
うろうろと歩き回った末、駅舎の隅に置かれた公衆電話に貼り付けられたタクシー会社の名刺を見つけてほっとした。
深呼吸してボタンを押すと、十回近くのコールの後、ようやく電話がつながった。

村に一つだけしかないタクシー会社。
その会社が所有するタクシーはわずかに二台。
白髪頭の運転手に住所を記したメモを見せると、「墓参りですか」と訊ねられた。

少し考え、「はい」と答えた。
運転手の瞳には、たった一人で辺鄙な村を訪れた少女に対する、心配の色がありありと見てとれて、ここで頷いかなくては、車を動かしてはくれない気がした。

「若いおじょうさんが、一人で行くような場所じゃ、ありませんからね」

村の外れの無人の教会を、訪れる者はほとんどいない。
でも、ごくたまに、教会に付属する小さな墓地に、墓参りをしに行く人がいるという。

エンジン音をたてながら、車は山道をのぼり始めた。
秋草におおわれた休耕田。
誰にも顧みられることのない柿の実が、細い枝の先で重そうに揺れている。

駅から往復すると3万円以上かかる場所だと聞かされて、少なからず憂鬱になった。
弟の遥と違い、真琴はひとりで出歩くことがない。
母親は常に忙しく、家族旅行とも無縁だった。
そんな自分が、たった一人で、こんなところまで来てしまったのだ。

橘直己のことが、ずっと頭から離れない。
いなくなってみてはじめて、直己のことを何一つ知らないことに気がついた。

あるだけの勇気をかき集めて、直己が所属していた派遣会社に行ってみた。
わずかな手がかりは本籍地だけで、そこにあった教会に付属する施設が、橘直己にとって唯一故郷と言える場所だった。

こんなところにいるはずがない。
いないことを確認できさせすれば、それで気が済むはずだった。
そのままUターンして駅に戻り、二度と橘直己のことは考えない。
どこか悲愴な決意は、運命のいたずらによって、あっけなくかき消された。

「おや、先客がいる」

運転手の低いつぶやきに、真琴は身を乗り出した。

暗灰色の空、古びた教会の傍らに、白い中古車が停まっている。

「降ります」と告げると、運転手が怪訝な顔で振り返った。

「あの車、きっと兄です。ここで会う約束なんです。今日は両親の命日で……」

こんな嘘をつくのは初めてだ。

高鳴る胸を抑え、しどろもどろにならないように気をつけながら早口で告げると、運転手はうなずいてくれたけど、自分もタクシーから降りてきた。

「きれいなお嬢さんを、こんな場所で一人にするのは心配ですから」

運転手は真琴を手招きし、教会の背後に続くなだらかな丘を登り始めた。

急速に色を失っていく晩秋の景色の中、西洋式の墓が不規則にならでいる。

橘直己はそこにいた。

黒いスーツを着て、白い薔薇の花束を背負ったその姿は、ヨーロッパの映画から抜け出たように端正で、真琴が知っている、どこかのほほんとした青年とは全く別人のようだった。

「なお……お兄さん！」

わざとらしく手を振ってみたが、直己は反応しなかった。

けれども、気遣わしげな面持ちでこちらを見ている運転手に向かっては、辛うじて会釈をしてくれた。

## 34．レクイエム2

「あの……タクシー代のこと……」
真琴が口を開くと、青年は小さく苦笑した。

「私が払ってはいけませんでしたか？　でも、使用人から兄に格上げしていただいたみたいですし……」
少女は赤くなって俯いた。
嘘をつくのはいやだけど、他にどんな呼び方があっただろう。

「ごめんなさい」
小声で謝ると、直己は困ったように手を振った。

「謝るのは私の方です。怖い思いもさせてしまいましたし、痛い思いも……」
頬に伸ばしかけた手を握りこんで、青年は視線を泳がせた。
こほんと一つ咳払いをして、何事もなかったように丘を登り始めた。

墓石群からかなり離れた丘のてっぺんに、二つの墓が並んでいた。
真琴は手を合わせたが、直己が捧げた薔薇の花束のせいで、墓石に刻まれた文字は見えなかった。

真琴の存在などまるっきり忘れたように、直己はいつまでもその場所に立ったまま、無言で墓を見下ろしている。
白い花びらを揺らした夕刻の風が、真琴の頬を撫で、長い髪をなびかせる。
どれだけ時が経っただろう。
真琴の小さなくしゃみに、青年ははっとしたように顔をあげ、驚いたように振り返った。

（本当に忘れられていた）

少し傷ついて目を逸らした時、青年の温もりを宿した上着が、ふわりと肩にかけられた。
いつも変わらぬ優しさに、真琴は意味もなく泣きたくなった。

「これ、兄と姉のお墓なんです」
兄姉がいたという話は初耳だった。

「こんな場所に立っているのを不思議に思ったでしょ？　実は牧師様に無理を言ったのですよ。少しでも高い場所の方が、迷わず天国に行けそうだと思って……本当に子供ですよね」
青年は笑った空を見上げた。
真琴も吊られて顔を上げると、鉛色の空が広がっていた。

聞きたいことも言いたいことも山ほどあった。
でも、不思議と言葉が出てこない。

「二人のために、もう一度、祈ってやっていただけませんか？」
やがてかけられた静かな声に、真琴はこくりとうなずいた。

## 35．レクイエム3

「これを蒔き終えたら駅までお送りしますから」
淡々とそう言って、直己は上着のポケットから小さな紙袋を取り出した。
薔薇の花束と一緒に買ってきたという袋の中には、シロツメクサの種が入っているというという。
促されて手を差し出すと、小さな緑色の種がパラパラと落とされた。
「どうして、シロツメクサなの？」
「丈夫だし、放っておいても、毎年、白い花がたくさん咲くからです」
「放っておかなければいいじゃない」
「まあ、それはそうですか……」
真琴は青年を振り返ったが、落日前の陽光を背負った青年の表情は、逆光のせいでよく見えない。
「お母さん……意識が戻ったわ」
「そうですか。それは良かった」
「会いにいかないの？　その……恋人なんでしょ」
最後の一粒を蒔き終えた青年は、少しの間黙っていたが、やがて観念したように、静かに首を横に振った。
「恋人などと言える関係ではありませんが……ご存知だったのですね」
「知っていたわ。もう、ずっと前から」

「あなたは、そういうことが、許せないタチだと思っていましたが」
「そ、そこまで堅物じゃないわ。ふ、二人とも独身だし、お母さんは美人だし、大人だし、恋多き女優だし……」

これ以上は言葉が続かない。
自分の貧弱なボキャブラリにうんざりしながら、真琴は赤くなって俯いた。

「寒くありませんか？」
あっさりと話題を変えられて、真琴を相手を流し見た。

「寒いのは直己さんの方でしょう？　痩せてるし、私に上着をとられちゃってるし」
脱ごうとした上着を両手で押さえられ、そっと前を合わされた。

「そんなことより、そろそろ出発しましょうか。最終列車に間に合わなかったら大変だ。水は井戸水があるけど、電気もガスもとっくの昔に止められているんです」

そんな風に言い出すことはわかっていた。
直己が時間を気にしていることに、真琴はさっきから気づいていた。

自分が何をしたいのかわからない。
ひどく不確かな感情が、胸の中で渦巻いている。
真琴は一歩後ずさり、いやだと言う代わりに、教会に向かって駆け出した。

教会と名のつくものに足を踏み入れたのは初めてだった。
鈍い軋み音とともに木製の扉は開いたが、祭壇があったと思われる場所は空っぽだった。

薄闇の中、ステンドグラス越しの光が、古びたオルガンの表面に光の花を咲かせている。
赤い花を指先でなぞってみたが、不思議と指は汚れなかった。
椅子に腰掛け、オルガンのペダルを踏んで、軽く鍵盤を押してみた。
「真琴さん、何を考えているんです！？」
素朴なオルガンの響きに、追いかけてきた直己の声が重なった。
「わからないわ」
「遥さんには言って来ているですよね？」
「ハルはアメリカ」
「アメリカ？　じゃあ、聖さんに……」
不快な不協和音が石の壁にこだました。
「どうして追い出そうとするの？！　どうして何も教えてくれないの？　三年間、ずっと、そばにいてくれたじゃない！　話を聞いてくれたじゃない！　それなのに、私は直己さんの病気のことだって、全然知らなかった！」
少女に泣き顔を向けられて、直己は苦しげに目を逸らした。
「世の中には、知ったってどうにもならないことも、知らない方が良いこともあるんです。でも、これだけは知っておいた方がいい。あなたを幸せにできるのは私じゃない」
「どうして言い切れるの？」
「言い切れますよ。賭けたっていい。もっとも賭けるものなんて何にもありませんが……」

「じゃあ、何か弾いて」
「じゃあって、どういう意味です？」
苦笑しながらも、まっすぐこちらに向かってくる直己の姿が、写真の中のタキシード姿の青年と重なった。
鍵盤に触れる指先から流れ始めた旋律は「きらきら星」。
ピアノとオルガンで楽器は違うものの、コンテストで何度も賞をとっている弟の弾き方と、直己の弾き方はよく似ている。
「すごく上手なのね」
「そうでもないですよ。遥さんがいつも弾いていらっしゃるから、覚えてしまいました。自分で言うのもどうかと思いますが、私は器用な人間で、大抵なことは見様見真似でできるんです」
「見様見真似で楽器が弾ける？」
「器用だって言ったでしょう？　幼い頃は、兄がこのオルガンを弾くのをいつも見ていましたから」
「お兄様がオルガンを？」
「兄は私以上に器用で、オルガンでも、ピアノでも、大工仕事でも……。あ、でも、姉はそうじゃなかったな。姉は少し不器用で、でも、歌はうまかった。真琴さんもそうでしょう？」
「私は不器用なんかじゃないわ」
「ふっ、まあ、そういうことにしておきましょう」
いつしか曲は、きらきら星から、アメージンググレースに変わっていた。
有名な曲だから、学校の行事などで過去に何度か歌ったことがある。
そのことを知ってか知らずか、直己は誘うように微笑んだ。

弾きながら、歌詞を口ずさむ青年に従って、真琴の唇からも歌が流れ出す。

Amazing grace how sweet the sound
That saved a wretch like me.
I once was lost but now am found,
Was blind but now I see.

真琴の澄んだソプラノが、教会の気を震わせる。
塗りの剥げたマリア像が、口元にかすかな微笑を浮かべて目を閉じている。
青年の横顔は幸せそうで、青年が弾くアメージンググレースは優しかった。

曲が終わって、はっと我に返った時、青年の瞳にはうっすらと涙が浮かんでいた。
「まるで・・・昔に戻ったようだ」
ありがとうと微笑まれて、真琴は曖昧にうなずいた。

結局、直己は、真琴の質問には答えていない。
また、はぐらかされたと思ったが、それを責める気にはなれなかった。

## 36．罪と罰

髪の色も肌の色も服装も体格も違う人たちが、同じ空間でごちゃまぜになりながら、それぞれの方向へと流れていく様を、真下広夢は険しい目で見つめていた。

どんなに大勢の人の中でも、広夢には遥を見つけられる自信があった。

でも、自分が見つけない限り、遥が自分を見つけてくれることは絶対にないこともわかっていた。

親友の双子の弟。

でも、真相はその逆で、遥の双子の姉だからという理由だけで、広夢は真琴に近づいた。

今では大切な親友だけど、誰からも愛される真琴のことを、ねたましいと思う気持ちだけはどうすることもできない。

遥の気を引きたくて、広夢は確かに嘘をついた。

だが、遥に告げたことは、全てが嘘というわけではなかった。

外資企業のエグゼクティブとして世界中を飛び回っている父なら、ニューヨーク市警にも何らかのコネクションがあるに違いない。

ただ、多忙を極めている彼が、いくら娘の頼みとは言え、遥のために動いてくれるはずもない。

学校をさぼって、学校理事長である祖父にも内緒で、こんなところまで来てしまった。

何度か連絡を入れたけど、厳格な祖父はかんかんで、今では電話にも出てこない。

ダイナースの家族カードが使えるのがせめてもの救いだけど、戻ったらしばらくは監視付きの生活だろう。

広夢の高校生活は遥を中心に回っている。
遥が載っているファッション雑誌と、苦労して手に入れた隠し撮りの写真は宝物だ。
生身の遥は、二次元の遥とは全くの別物だったけど、知れば知るほど、麻薬のようにはまっていく。
美しい容姿、時折見せる気まぐれな優しさ、天使のような微笑、双子の姉に対する異常なほどの執着。
淫らで退廃的なものと、ストイックで清らかなものを同居させながら、圧倒的な才能と華やかなオーラを周囲に撒き散らす少年から、片時も目が話せない。

まともに相手にされないことは、わかっていた。
でも、双子の姉に対する執着の、何分の一かでも、自分に向けさせることはできないだろうか。

思いつめた少女の瞳に、少年の姿が映ったのは、午前十時を少し回った頃だった。
ジーンズにTシャツ。その上に薄手のカットソーを重ね着して、首元にシンプルなチョーカーを飾っただけなのに、どうしてあんなに目を引くのだろう。

「ハル君」
荷物を預け終えた少年がこちらを振り返る。
その何気ない仕草までもが鮮烈で美しい。

日本人離れした明るい色の瞳と目が合った時、少女は昨日のことも忘れて駆け出していた。

冷たくあしらわれるかと思ったが、話があると告げると、遥はあっさりとついてきた。

「私、初めてだったの」

人影のない場所に男の子をつれこんで、こんなことを言うなんて、どうかしている。

でも、言葉は止まらない。

「私、ハル君が好きなの！　ハル君に冷たくされたら、もう生きていけない！」

鼻がつんとして、目の奥がじんわりと熱くなった。

こんな風に誰かを好きになったのは、初めてなのだ。

正直な気持ちをぶつけたのに、少年はきょとんとした面持ちで首を傾げた。

「で、僕にどうしろと？」

困ったような苦笑とともに訊ねられ、広夢の目がみるみる潤みだす。

「どうして笑うの！？」

「ごめん、だってさ、初めてだったのは知ってるよ。でも、誘ったのも、途中でやめるなって言ったのも、君の方だ。冷たくされたらって、どういうこと？　昨日の言葉を真に受けているのかも知れないけど……」

広夢は唇をかみ締めた。

少年の言うとおりだった。

興味のない相手に、わざわざ冷たくする理由がどこにある？
広夢の沈黙をどう受け取ったのか、遥は殊勝な顔をして目を伏せた。
「でも、悪かったと思ってる。マコの友達だなんて知らなかったんだ。本当だよ。どうしてずっと黙っていたの？」
そんな言葉を聞きたいわけじゃない。

「奪っちゃったものは、もう返せないけど……」
ごめんねという声音の優しさに、広夢は容赦なく打ちのめされた。
この優しさは、自分ではなく、双子の姉に向けられたものに他ならない。

ポケットに手を入れて、固い感触を握りこんだ。
広夢は上着のポケットに、切り札をしのばせていた。

ホテルから持ってきた果物ナイフには、意外にも鋭利な刃がついていた。
それを自分に向けた途端、遥が目を見開いた。
瞳に喜色の色が浮かべた少女は、ナイフを奪い取ろうとする少年に全身で抵抗しながら、思い切り腕を振り上げた。

本気で自分を傷つけるつもりはなかったが、求めるものを手に入れることができるなら、一筋の傷をつけることに躊躇はなかった。
力を加減する器用さを、少女は持ち合わせていなかった。

振り下ろした切っ先が何かに沈み込む不気味な感触。
驚いて手を離した少女が、閉じていた目を再び開けた時、眼前には表情をなくした遥が立っていた。

わき腹には、さっきまで自分の手の中にあった、果物ナイフが刺さっていた。
傷を庇うように前傾姿勢になった少年の指先が、さまようようにナイフに触れた。

音のない世界で、スローモーションの映像を見ているようだ。
白っぽいカットソーに広がっていく、赤い花のようなシミだけが鮮やかだった。

## 37．眠り薬

気がつけば、あたりはすっかり暗くなっていた。
ステンドグラスの模様を映した光の花も、いつの間にか消えている。

「紅茶でもいかがです？」

そう声をかけられて、真琴は無言で頷いた。
どうやら直己は、真琴を最終列車に乗せること断念したらしい。
でも、最終列車に乗らないということは、ここに泊まるということだ。

直己が一条家にいた頃は、二人きりの夜など珍しくなかった。
でも、今は、どうなのだろう。

教会の礼拝堂の裏は、小さな食堂を備えた牧師専用のスペースになっていた。
カセットコンロで沸かしたお湯を、食堂に置き捨てられたカップにそそぎ、ティーパックで抽出しただけの紅茶を飲みながら、少女は小さく吐息をついた。

三年前に無人になったという教会は、すみずみまで掃除され、ステンドグラスは磨き上げられ、オルガンもきちんと調律されていた。
直己がやったことは間違いないけど、オルガンの調律までできるとは知らなかった。

「これからどうするの？」
「そういうあなたはどうなさるおつもりなんです？　この村にはまともな宿なんてありませんが」

「まともじゃない宿ならあるの？」
「山を越えた所にラブホテルが一つ」
意味深な瞳を向けられて、真琴はカップを取り落とした。
「冗談ですよ」
ハンカチを持った手が伸びてきて、こぼした紅茶を手際よく拭いていく。
からかうような青年の笑顔から目を逸らし、真琴は唇をとがらせた。
一条家との雇用関係などとっくに切れているのに、青年の態度は変わらない。
優しい眼差しも、穏やかな微笑も変わらない。
病気のことも、自分は裏社会の人間だと告白したことも、その後で交わしたキスのことも、なかったことにしてしまうつもりなのだ。
「直己さんが、もっと、いやな人だったら良かったのに……」
真琴は椅子から立ち上がり、テーブルを回って青年と向き合った。
「私はずっと、あなたがが私に優しいのは、優しくするのが仕事だからだと思っていたわ」
「どうして過去形なんです？」
「あなたが私を愛していることに気づいたから」
青年の目がゆっくりと逸らされた。
「真琴さんを一番愛しているのは遥さんです」
弟の名前を持ち出されて、かっとした。
橘直己という青年は、優しいくせに時々残酷だ。
それに一番とか、二番とかって……。

「そんなことがどうしてわかるの？　第一、ハルは弟よ！　でも、たとえ血がつながっていなかったとしても、私はハルを選ばない。ハルは……弟は……私が足枷にならなければ……どこまでも高みにのぼれるのに……」

少女の言葉が唐突に途切れた。

「……ごめんなさい……何だか……」

真琴は眉を寄せながら、こめかみに手を当てた。

急速に襲ってきた睡魔が、思考力を奪っていく。

話に集中しようと思うのに、頭にクモの巣が張っていくで、なかなか言葉が出てこない。

ぐらりと上半身が傾いだ時、青年の腕が伸びてきた。

ふわりと抱き上げられた時、薬を盛られたのだと気がついた。

（私を眠らせて、また、いなくなるつもり？）

もしも今、訊ねたら、青年は微笑して頷くだろう。

大切なことを、まだ伝えていないのに。

## 38．ナイト1

「あなたが現れるとは意外ですね」
教会の扉を力まかせに押し開くと、橘直己は少しも意外そうでない顔で、そんなことを言ってきた。

「真琴はどこだ？！」
勧められた椅子には見向きもしなかった。
青年が指差す場所にまっすぐ向かった少年は、仮眠室に横たわる少女の姿に絶句した。

「真琴！　どうした！　真琴！」
「手荒なことはやめてください！」
少女を夢中で揺さぶっていた少年は、追いかけてきた青年に背後から腕をつかまれ、憤怒の表情で振り返った。
手はすぐに離れたが、聖の頭は沸騰したままだった。

「真琴に何をした！」
「紅茶に睡眠薬をいれました」
「睡眠薬！？　ふざけるな！」

振り上げた拳を、相手が軽々と避けたのは意外だった。
聖の中にインプットされている橘直己は、どこにでもいそうな無個性な青年だ。
礼儀正しく、控えめで、空気のように何の印象も残さない。
変わっているのは、住み込みのハウスキーパーなんていう風変わりな仕事をしていることぐらいで、でもそれも、家事の手際の良さを目の当たりにすれば、納得せざるを得なかった。

それなのに、黒い細身のスーツを着込んだ、目の前にいる青年はどうだろう。

## 39．ナイト2

無防備に立っているように見えるのにスキがない。
圧倒的な存在感を放っている。

剣道で鍛えた感覚が、こいつは危険だと告げだした。
聖は右足を後退させ、相手との間合いを確保した。
さりげなく得物になりそうなものを探していると、目の前の男がくすりと笑った。

「そんなに警戒しなくても何もしませんよ。何かしたところで、剣道界期待のホープが相手では、返り討ちにあうだけだ」

直己は苦笑を浮かべたまま、芝居がかった仕草で軽く両手を持ち上げた。

「ケータイはつながらないし、正直困っていたところです。タクシーを待たせているのでしょう？　何なら私がタクシーまでお運びしますけど？」

その視線の先で真琴が穏やかな寝息をたてている。
相手の申出をきっぱりと断って、聖は少女を抱き上げた。

「あ、そうだ、これも持って行っていただけますか？」
真琴を抱えたまま、差し出された紙袋の中を覗き込むと白い箱が入っていた。
パッケージに記された「グリベック」の文字を見てぎょっとした。
真琴の母親が言っていた。

「グリベック」は慢性骨髄性白血病の特効薬で、橘直己の常備薬だ。一粒３２００円以上する高価な薬だが、１日１粒飲むだけで健常者と変わらぬ生活ができる。

「真琴さんが持ってきたものですが、ひょっとしたら、あなたのおじい様の病院から持ち出してきたものじゃないかと思って……」

真面目な真琴がそんなことをするはずがないと思ったが、すぐに思い直した。

真琴は聖の祖父に実の孫以上にかわいがられていて、美山病院の中はどこでも顔パスだ。

だが、一体、どういうことだ？

「お前は麗華さんの愛人なんだろ！？　真琴がこんなことまでするのはおかしいじゃないか！」

「そうですよね。おかしいですよね。私もそう思います」

ゆっくりと動いた瞳が、眠る少女に向けられた。

その刹那、軽いデジャヴに襲われた。

青年が少女に向ける切ない眼差しは、遥が時折見せるのと同じものだった。

どいつもこいつも、どうして真琴のことが好きなのだろう？

反発よりも動揺を感じて、聖は視線を泳がせた。

「遥さんはどうなさったのですか？」

「あいつはニューヨーク。俺はハルに頼まれて……」

自分でも不思議なほど素直に答えていた。

もしもこの教会に真琴がいたら、本人がどんなに嫌がっても連れ戻

すようにと言われて来た。
橘直己のことを、遥は何一つ言わなかったけど、本当はここに直己がいることを知っていたに違いない。

「目を覚ました真琴が、お前のことを聞いたら、何と言えばいい？」
「何とでも。もう二度とお目にかかることはありませんし」

さらりと告げられて、思わず足を止めていた。
重い病にかかった男が、自分の命をつなぐ薬を手放して、もう二度と会うことはないと言っている。
そのまま出て行こうとしたが、思い直して、持っていた紙袋を再び直己に押し付けた。

「料金は払っとく。病人は病院へ行け。ちゃんと医者に見てもらえ」

それだけ言って外へ出た。
タクシーに乗り込んだまま、しばらく教会を見ていたが、重い扉は閉ざされたままだった。

## ４０．夜闇

このまま自宅まで走ってくれと告げると、ガタゴトと山道を走っていたタクシーが停止した。

「お客さん、冗談はやめてくださいよ。いくらかかると思ってるんですか！？」

「冗談は言ってないし、いくらかかったってかまわない」

落ち着いた声で返されて、驚いた運転手は、思わず背後を振り返った。

眼鏡をかけた少年と、その膝に頭を載せてこんこんと眠り続ける少女。

田舎の村では、滅多に目にすることのできない美貌の二人を見比べながら、白髪頭の運転手は困惑顔で頭をかいた。

「あの人はどうしたんです？　教会にいたでしょう？　ほら、このお嬢さんの・・・」

何気なく少女を指差した途端、少年の切れ長の目が険しくなった。

あわてて言葉を飲み込んだ男は、逃げるように前に向き直った。

余計な詮索などしないで、淡々と仕事をこなすことは簡単だが、少年に抱きかかえられて運ばれてきたのは、他ならぬ自分が駅からここまで乗せてきた「お客さん」だった。

この不景気の中、長距離を移動してくれること自体は歓迎だ。

だが、こんなに車が揺れているのに、少女はどうして目を覚まさない？

混乱した頭で車を発進させながら、男は昼間見た光景を思い出していた。

少女は墓参りに行くと言っていた。
今日は両親の命日で、教会で兄と会うことになっているのだと。

教会の隅に一台に車が停まっていた。
少女の兄だという青年は、墓地のある丘の上にいた。
黒いスーツ。
手には白い薔薇の花束。
教会の墓地に、これほどふさわしい姿はない。

最後にそっと振り返った時、丘を歩いていく二人の後姿が見えた。
自然に二人が寄り添う様を見て、わけもなくほっとしたのは、ほんの数時間前のことだ。

（あの青年はどうなったのだろう？）

全身に孤独をまといつかせたようなたたずまいは、若い頃に妻を亡くし、ずっと一人で生きてきた初老の男の目に今も焼きついたままだ。

（あの青年は・・・）
白い車は停まったままだったから、今も教会にいるはずだ。

外は真っ暗で、激しい雨が降っていた。
聞こえるのは、車のエンジン音と、車体を叩く雨の音だけ。

そっと視線を動かすと、バックミラーに映る少年は、唇を硬く引き結んだまま、睨むように窓の外を見つめていた。

## 41．夜闇2

日曜日だったから、東門の門扉は施錠されていた。
西門に回れば警備員がいて、用件を告げれば中に入れてくれるのだが、木下雅美はそうしなかった。

短い助走の後、思い切り地面を蹴り、鮮やかに門扉を飛び越えると、短いスカートの裾が翻り、すらりと伸びた足があらわになった。

たまたま近くを通っていた、宅配会社のユニフォームを来た男がそれを見て、両手一杯に抱えていた荷物を取り落とし、取り落としたことにはっとして、あわてて拾い上げた頃には、少女の姿は消えていた。

（一体、どうなっているのよ！）

真下広夢が姿を消してから8日になる。
ニューヨークにいる父親に会いに行っているとかで、ケータイも通じない。
さすがはセレブと思ったいたけれど・・・。

「雅美、私、死ぬから・・・」

広夢から妙な電話がかかってきた時、雅美はバイト先にいた。
特別に学校の許可を取り、近所のファミレスで、日曜日だけ働くようになったのは先週からだ。
つまりは今日が2日目で、短い休憩時間はそろそろ終わりに近づいていた。

「何言ってるの？　どこにいるの？」
「天国に近いところ」
「天国！？　で、そこからは何が見えるの？」
「体育館の屋根」と消え入るような声で告げられて、雅美は店を飛び出した。
門を飛び越え、校庭を走りぬけ、体育館のまん前で足を止め、並び立つ建物群を仰ぎ見た。
天国に近くて、体育館の屋根が見える場所となれば、当てはまる場所は限られてくる。
図書館、研究棟、そして・・・。
体育館から最も近いＢ棟の屋上に人影はなかったが、立ち入り禁止のその場所が一条遥のお気に入りの場所であることを思い出し、そのまま校舎に飛び込んだ。
真下広夢は、屋上の手すりにしがみつくようにして立っていた。
姿を現した友を見て、泣きはらした目から、新しい涙が零れ落ちた。
「広夢、飛び降り自殺の死体って、目玉とか、脳しょうとか、飛び出して、すっごく悲惨なんだって知ってた？」
一歩ずつ、ゆっくりと距離をつめながら、雅美は両手を差し出した。
「こっちに来て、何があったのか聞かせて？」
いつからここにいるのだろう。
広夢は手すりにはりついたまま動かない。
カールのとれかけた長い髪が風に煽られて、意志を持った生き物のようだ。

「私ね、ニューヨークにいたの」

相手が口を開いたので、雅美はほっとして息を吐き出した。

「知ってる、お父様のところでしょ？」

広夢は無言で首を横に振り、ふっくらとした唇をかみ締めた。

「空港でハル君を見かけて、追いかけたの。色々がんばったけど、だめだった。ハル君は、私のことちっとも見てくれなくて、それがすごく悲しくて・・・私・・・ハル君の気を引くために、果物ナイフを自分に・・・」

「ナイフを自分に？　まあ、気持ちはわからないでもないけど・・・。とにかく、そこは危ないから・・・」

「刺しちゃったの！」

「怪我したの？　だったらなおさら・・・」

「違うわ！　ハル君を刺しちゃったのよ！」

雅美は言葉を失った。

屋上の手すりからどうやって広夢を引き離そうかと、そのことばかりを考えていたせいで、広夢の言っている意味が、すぐには理解できなかった。

「空港で・・・血がたくさん出て・・でも、ハル君、私に逃げろって、自分は大丈夫だから、このまま帰国しろって！　私、怖くて、人を呼ばなくちゃと思ったけど、本当に怖くって・・・だから、私・・・」

「逃げたの？」

思わず口をついて出たひとこと。
その刹那、広夢が手すりから身を乗り出したのを見て、夢中で背後から飛びついた。
二人分の体重を受け止めかねた手すりがぐらりと揺れる。
それを目の端におさめながら、雅美は虚空に差し出された広夢の手をつかもうと、前のめりに手を伸ばした。

## 42．夜闇3

一瞬だけ触れた指先。
その指は温かかったのか、それとも、冷たかったのか。

あっけなく、まるで捨てられた人形のように、少女の身体は音もなく落下して、間もなく地面に叩きつけられた。

そのあまりに短い時間が、壊れかけの手すりに辛うじて身体を支えられたままの少女には、気が遠くなるほど長く感じられた。

これは悪夢だ。
自分は夢を見ているんだ。
夢なら覚める。
必ず冷めるはず。

今の今まで、校内は静まりかえっていたが、人が全くいないわけではなかった。
それはB棟の場合も例外ではなく、落下する「何か」に気がついた者もいた。

アリが甘いものに群がるように、それぞれの建物から複数の影が出て、少女の周囲に集まってきた。
右往左往する人影。
中にはこちらを見上げて何やら叫んでいる者もいる。

それなのに、真下広夢は地面にうつぶせに倒れたまま動かない。
投げ出された左足がありえない方向に折れ曲がり、壊れた人形にしか見えなかった。

（どうすれば良かったのだろう？）

あまりに非現実的で、感情は凍りついたままだった。
歪んだ手すりに辛うじてひっかかったまま、雅美は虚ろに目を開けていた。

屋上で広夢を見つけた時点で、警察に連絡をすれば、良かったのだろうか。
それとも大声で助けを呼べば、誰かが駆けつけてくれたのだろうか。
そもそも広夢は、屋上から飛び降りるつもりがあったのだろうか。

一条遥を誤って刺してしまったのは本当だろう。
でも、刺そうとして刺したわけじゃなく、もっと言えば逃げたのでもなく、遥によって逃がされたのだ。

血がたくさん出たと言っていたけど、重傷とは限らない。
傷を治した後、何事もなかったかのように、戻ってくるかも知れないのだ。

屋上から電話をかけてきたのは、自分自身にナイフを向けて遥の同情を引こうとしたように、雅美に助けを求めただけではなかったか？

もしそうだとすれば・・・。

やがて駆けつけた警察に差し出された手を、雅美はどうしてもつかむことができなかった。
けれども飛び降りる勇気もなく、結局は強引に助けられた。

「私がやったんです」

若い警官は、同じ主張を繰り返す雅美に驚いて、佇立する少女の前に膝をついた。

「真下広夢さんは、君の友達？」

俯いたまま肩を震わせて頷く少女を気遣いながら、警官は、広夢のポケットに遺書が入っていたこと、状況から判断して雅美が広夢を突き落としたとは考えられないこと、屋上の手すりの金属が腐食していたことなどを、一つひとつ丁寧にあげてから、最後にこうしめくくった。

「君は友達を助けようとした。それができなくて、自分を責めているのかも知れないけど、人間はスーパーマンではないんだよ。それどころか、手すりがあともう少しひどく歪んでいれば、君も一緒に落ちていた」

（それでも私がやったんです）

浮かんだ言葉を、今度は口にしなかった。

ハンカチをそっと頬に押し当てられるまで、自分が泣いていることすら気づかなかった。

突然鳴り響く、救急車のサイレン音。

はっとして振り返った雅美の目に、体育館の屋根がぼやけて見えた。

## ４３．夜闇４

目を開けると、薄暗い部屋に寝かされていた。
焼けるような痛みが、鈍い痛みに変わっている。
頭がぼんやりしていて、現状を把握するのに時間がかかったが、腕に点滴がつながっているのに気がついて、何となく今の状況を理解した。
暗さに慣れた目に、天井のシミが浮かび上がって見える。
美山病院の清潔で近代的な病室には、天井のシミどころか、チリ１つ落ちていなかったけど、ここはやけに薄汚れていて、まるで廃屋の一室だった。

頭上のシミは、歪んだ男の顔。
そこから少し離れたところに、たくさんあるシミは、アリの行列。
天井から目を逸らすと、カーテンのない窓から向かいのビルが見えた。
ビルのシルエットに切り取られたちっぽけな空は、月も星もない暗闇で、無数のアリに侵食されていた頭の中を、現実に引き戻した。

パスポートとエアチケットを処分して、手荷物の中から取り出した上着で傷を隠し、タクシーに乗り込んだことは覚えている。
イエローキャブの運転手の顔はうろ覚えだが、ギャング映画に出演できそうな強面の黒人だった。
行き先を訊ねられ、口をついて出た言葉は“Ｈｕｄｓｏｎ Ｒｅｖｅｒ”。
ハドソンリバーのどこだと重ねて聞くので、””Ｇｏ ａｌｏｎｇ ｔｈｅ Ｈｕｄｓｏｎ Ｒｉｖｅｒ”と答えやった。

ハドソンリバー沿いにどこまでも。

こちらの意識がなくなったら、身包みはがして、川に捨ててもらっても構わない。

生きることを放棄したわけじゃないけど、帰国の便に乗り損ね、ひどい激痛に気力も体力も奪われて、どうにでもなれという気分だった。

（あの子はちゃんと飛行機に乗れただろうか）

真琴の親友で、真下広夢という名前の女の子。

泣いていたから、ひどいことをしてしまったのだろう。

でも、何がどういけなかったのか、遥にはわからない。

わからないということが、たぶん、罪なのだ。

（マコのことも、ずっと、ずっと、傷つけてきた）

あれほど好きだったピアノに真琴が触れなくなった時、遥は遥なりに考えた。

真琴ががんばっていることは、わざと手を抜く。

真琴が望むなら、幼い弟のままでいる。

幼稚なルールだったけど、真琴のそばにいられるなら、いつまでだってお芝居を続けるつもりだった。

## ４４．夜闇５

「気分はどうだ？」
突然、日本語で話しかけられて、遥は瞳を動かした。
無精ひげの散った顔が、じっとこちらを見下ろしている。

白衣をはおっているから、医者なのだろう。
おおざっぱに後ろで束ねた髪と、加えタバコと、白衣のくたびれ具合から判断するに、まともな医者とは思えないが、脈をとる仕草は様になっている。

“Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？”
日本語がわからないと思ったのか、今度は英語で話しかけられた。

気分は悪い。
最悪だ。
でも、それを言ったところで何になる？
しばらく無言で考えた後、“Ｙｅｓ，　Ｉ　ａｍ”と答えたら、変な顔をされてしまった。

「日本語は通じないのか」
「通じてるよ。日本人だし」

「だったら、ちゃんと答えろ、その傷はどうした？」
「ＪＦＫ空港でニューヨークマフィアにやられた。パスポートもクレジットカードもエアーチケットも盗まれて・・・」
そこまで言ったところで、「ふざけるな」とすごまれた。

「マフィアにやられてその程度の傷で済むものか」

「じゃあ、前言撤回。果物ナイフでリンゴの皮を剥こうとしたら、手が滑った」

むっとした顔で黙り込んだ相手を、遥も無言で観察した。
年は三十代前半。
吊りあがった目に、少しこけた頬。
身長は・・・１８０センチと少々。
よく見れば、まあまあの男前。
観察を終えた頃、男はやおらポケットに手を突っ込み、とりだしたものを遥の顔面に突きつけた。

「言いたくないなら言わなくてもいい。とにかく、さっさと電話しろ」
銃かと思ったらそうではなかった。突きつけられたケータイに視界をふさがれたまま「どこへ？」と訊ねると、面倒くさそうな声が返ってきた。

「親でも、学校の先生でも、友達でも。警察以外で、お前を引き取りにきてくれる人」
「警察はだめなの？」
「俺はモグリの医者だからな。色々聞かれるとやっかいだ」

遥は殊勝に頷いて、横になったまま、突きつけられたケータイを手に取った。
真剣な面持ちで液晶画面を睨みつけたまま、頭の中できっちり１０秒数えてから、苦しげに目を閉じた。

「どうした？　疲れたのか？」
いかにも、面倒くさそうだった男の声は、一瞬で医者のそれに戻っていた。

さっきと同じポケットから、今度は聴診器が現われた。

「思い出せない」

「は？」

「何も思い出せない」

すがるように告げると、男はあっけにとられた面持ちで、聴診器を床に取り落とした。

真実を突き止めた今、ニューヨークに用はない。

だから早々に帰国するつもりだった。

でも、なぜ、帰国する必要があるのだろう？

ＪＦＫ空港で広夢に刺された時、そんな疑問がわいてきた。

遥が差し伸べる手を、真琴が決してつかまないことはわかっているのに、ケータイを突きつけられた時、真琴の声が聞きたいと思った。

姉弟でいると決めたのに、そんな風に思う自分が恐ろしくて、声を聞けば、一度でも名を呼べば、もう正気ではいれない気がして、記憶を失ったふりをした。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7004e/

---

トゥインクル　トゥインクル

2011年1月8日13時42分発行